東部関東地域における弥生中後期社会

Middle to Late Yayoi Period Society in Eastern Kanto Area

小林青樹・轟　直行・池田和之

KOBAYASHI Seiji, TODOROKI Naoyuki and IKEDA Kazuyuki

❶はじめに
❷栃木県地域における弥生時代中期から後期の竪穴建物数の推移
❸千葉県北部地域における弥生時代中期から後期の遺跡数と竪穴建物数の推移
❹弥生時代中後期における東部関東地域の特殊性と社会変動
❺おわりに

［論文要旨］

本論は，弥生時代中期後半から後期後半にかけての東部関東地域（栃木県地域・千葉県北部地域）を対象に，竪穴建物数の増減の推移を検討することによって社会変動について考えるものである。栃木県地域と千葉県北部地域の両地域ともに，中期後半段階に増加した竪穴建物数は，後期前半段階に急減し，後期後半に再び急増という増減を繰り返している。栃木県地域では，全期間を通じて 10 数軒程度と竪穴建物が少なく，前段階の再葬墓造営集団の居住システムである小規模分散型を継続し，台地上でのアワ・キビを主体にわずかなイネの栽培をし，人口規模の小さい社会であったと推定した。一方，千葉県北部地域は栃木県地域と異なり，時期によって居住システムが大きく変化した。中期後半は六崎大崎台遺跡を中心とする大規模環濠集落に人々が集住する居住システムであったが，後期前半になると 10 軒未満の竪穴建物で構成される小規模集落が営まれ，集落間較差のない等質性の高い居住システムに変化した。そして，後期後半になるとヒト・モノが集まり，集落規模も大きいハブ集落が複数現れ，小規模集落との間に較差が生じることが明らかとなった。

【キーワード】東部関東地域，竪穴建物数，小規模分散型，後期前半，後期後半

❶……はじめに

本論は，本共同研究の中心的課題である，弥生時代における集落の規模の変遷と環境変動との関連性が広域な地域での連動した社会変動であることを明らかにするため，東部関東地域を対象にこの問題について分析検討を行う。

弥生時代の関東地域では，弥生時代中期中葉（紀元前 3 世紀頃）に南関東地域において本格的な水稲耕作が開始され農耕社会化が急激に進行し始める。その後，100 年程度の後に，巨大な環濠集落が各所に出現し人口の集住化が顕著となった。しかし，こうした状態は長くは続かず，環濠集落の営造は紀元前後以降瓦解し，後期初頭から前半になると集落は突如減少する。しかし，後期後半段階になると集落は急増し，同時に大規模な人口の集住化によって超巨大な集落が出現する。以上のような南関東の状況に対して，東京湾東岸側の東部関東地域では，特に旧利根川と香取の海周辺とその東側の地域において稲作の存否が不明で，一時的に環濠集落や方形周溝墓は出現したものの，青銅器や鉄器などが極めてわずかであるか，みられない，いわば非稲作地帯であったとこれまで考えられてきた。(1)

弥生時代の地域性をまとめた藤尾慎一郎は，こうした本格的な稲作農耕社会へと移行しなかった地域を「中の文化」として捉えたが［藤尾 2017］，特に栃木県地域においては古墳時代前期段階まで水田の存在はなく，東部関東地域に特殊な弥生文化があったことは間違いない。

このように西側の弥生文化地域で本格的な弥生文化が形成されている一方で，どのように特殊とされる社会が形成されていったのか。この問題を考えるためには，当該社会の成熟度を検討する必要がある。その理由は，本格的な稲作農耕を行うためには，小規模で分散化傾向の強い遺跡では本格的な農耕社会化への条件が不十分であり，より集住度が高く規模の大きい遺跡でなければならないと予測される。そこで，この問題を検討するためには，各遺跡の規模や集住度を客観化するため，一つの方法として竪穴建物の数を比較検討することが有効であると考える。近年，小林嵩によって東部関東地域の一部で後期前半に遺跡数が増加することが指摘されてはいるものの［小林嵩 2018］，これまでに当地域においてこうした視点での検討は少なく，関東地方における弥生文化後半期の広域な変動を考える上で有効であろう。

こうした見方を元として，本稿では，東部関東地域の栃木県地域と千葉県北部地域を事例として，中期後半から後期後半までを対象に，時期ごとに竪穴建物の数を集計し，その増減の推移を検討することによって居住のあり方から社会の実態にせまることを目的とする。竪穴建物の数に注目した理由は，集落遺跡の規模の推定が可能となるからである。分析にあたって，時期の分け方については各地域の土器型式編年に留意しつつも，細かすぎる段階区分ではデータの読み取りが困難なことと，栃木県地域と千葉県北部地域の比較を細分した段階区分で行うことが困難であるため，「中期後半」「後期前半」「後期後半」という段階区分によって検討を行う。

なお，千葉県北部地域の分析は，上述のような本格的な弥生文化が形成されたかどうかの境界である旧利根川と香取の海周辺に位置し，中期後半に方形周溝墓や環濠集落を受容したものの後期には廃れた地域であり，栃木県地域から茨城県地域と同様に縄文施文土器群を用いた広範囲にわたる地域圏である。栃木県地域が境界の東側にあって本格的な弥生文化形成が遅れたのに対し，千葉県

北部地域は本格的な弥生文化形成の早い上総地域に近接し，さらに東京湾西岸地域とも近く，両地域との交流が盛んであった。こうした共通した土器文化圏である両地域について，地勢的な違いによる差異を検討することができる点で両地域の比較は有効であると考える。

❷……栃木県地域における弥生時代中期から後期の竪穴建物数の推移

ここでは，栃木県地域における弥生時代中期後半から後期にかけての竪穴建物数の推移について検討を行う。なお，表１で「弥生時代中期後半～後期前半」などと表記されているものは，竪穴建物の時期を本稿の段階区分にもとづいて特定できなかったもので，今回は検討の対象外とした。これは千葉県北部地域の検討でも同様である。また，これより先，「弥生時代中期後半」といった段階区分を表記する場合は「弥生時代」の表記を省略する。

栃木県地域内の最も古い弥生時代の竪穴建物例は，中期中葉段階の常見遺跡である［足立佳代 2009］。この常見遺跡の後，中期後半段階になると 20 遺跡で 30 軒の竪穴建物が検出されている（表１・図１・2）。それ以前の段階には検出されなかった竪穴建物が，20 遺跡から検出されたことは，竪穴建物数の推移において重要であろう。ただし，竪穴建物の数は確かに増加しているが，集落規模が大幅に増大してはおらず２桁を超える竪穴建物をもつ集落はほとんどない。

中期後半における１遺跡の竪穴建物数は１軒がほとんどで，複数軒を検出したのは，山崎北遺跡

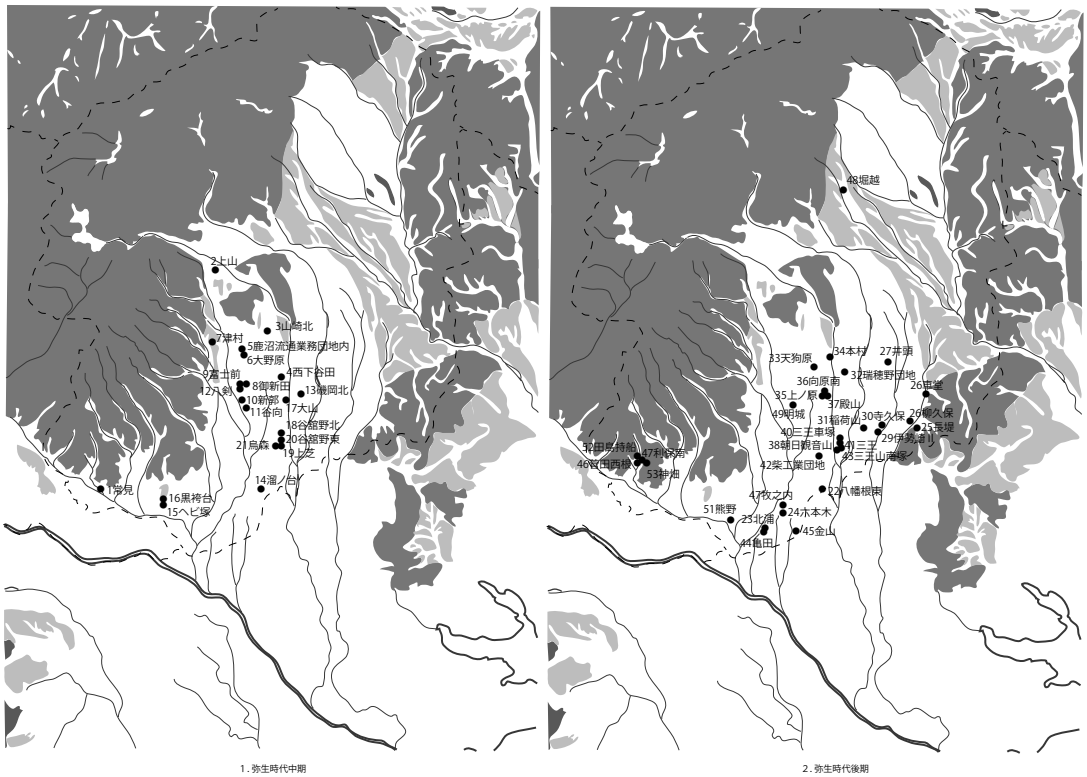


図１　栃木県における弥生時代中期から後期の遺跡

表１　栃木県地域における竪穴建物の集計結果

番号	所在地	遺跡名	竪穴建物跡総数	時期比定竪穴建物跡数	弥生中期後半	弥生後期前半	弥生後期後半	弥生中期後半〜弥生後期前半	弥生後期前半〜弥生後期後半	弥生後期前半〜古墳前期
1	足利市	常見								
2	今市市	上山								
3	宇都宮市	山崎北	3	3	3					
4	宇都宮市	西下谷田	1	1	1					
5	鹿沼市	鹿沼流通業務団地内	3	3	3					
6	鹿沼市	大野原	1	1	1					
7	鹿沼市	津村	1	1	1					
8	壬生町	御新田	1	1	1					
9	壬生町	富士前	1	1	1					
10	壬生町	新郭	1	1	1					
11	壬生町	谷向	1	1	1					
12	壬生町	八剣	1	1	1					
13	上三川町	磯岡北	1	1	1					
14	小山市	溜ノ台	2	2	2					
15	佐野市	ヘビ塚	1	1	1					
16	佐野市	黒袴台	1	1	1					
17	上三川町	大山	1					1		
18	南河内町	谷館野東	1					1		
19	国分寺町	上芝	1					1		
20	国分寺町	谷館野北	1					1		
21	国分寺町	烏森	5	5	5					
22	小山市	八幡根東	1	1		1				
23	小山市	乙女不動原北浦	1	1		1				
24	小山市	間々田六本木	1	1		1				
25	益子町	長堤	2	2			2			
26	益子町	車堂	3	3			3			
27	真岡市	井頭	4	4			4			
28	真岡市	柳久保	5	5			5			
29	真岡市	伊勢崎Ⅱ	2	2			2			
30	真岡市	寺久保	1	1			1			
31	真岡市	稲荷山	1	1			1			
32	宇都宮市	瑞穂野団地	2	2			2			
33	宇都宮市	天狗原	1	1			1			
34	宇都宮市	本村	13	13			13			
35	上三川町	上ノ原	10	10			10			
36	上三川町	向原南	4	4			4			
37	上三川町	殿山Ⅰ	21	21			21			
38	南河内町	朝日観音	7	7			7			
39	南河内町	三王	2	2			2			
40	南河内町	三王山車塚古墳群	1	1			1			
41	南河内町	三王山南塚２号墳	3	3			3			
42	国分寺町	柴工業団地内	4						4	
43	小山市	金山	1	1			1			
44	小山市	乙女不動原北浦亀田	2	2			2			
45	小山市	牧ノ内	5	5			5			
46	足利市	菅田西根	1	1			1			
47	足利市	利保南	3	3			3			
48	矢板市	堀越	2							2
49	壬生町	明城	7							7
50	佐野市	堀米	1							1
51	藤岡町	熊野	1							1
52	足利市	田島持船	3							3
53	足利市	神畑							1	
合計			143	121	24	3	94	4	5	14

［上野修一他 1998］の3軒，鹿沼流通団地内遺跡［山口仁他 1991］の3軒，谷館野北遺跡［日下田欣一他 1990］の1軒，烏森遺跡［藤田典夫他 1986］の5軒の計4遺跡にすぎない。これは，前段階に比べれば増加したように見えるものの，実態としては前段階の特徴である小規模かつ分散化傾向が継続していることを示している。

後期には30遺跡・112軒の竪穴建物が検出された。しかし，後期の前半と後半は大きく異なり，後期前半段階は3遺跡・3軒と前段階に比べて竪穴建物を有する遺跡の検出がほとんどなくなってしまう。この段階に，何らかの要因によって集落が急減したことを示している。

これに対して，後期後半段階にはこの状況が一変する。この段階は27遺跡・94軒となる。検出された竪穴建物は中期後半の約3倍以上と急増する。特に従来みられなかった集落として，本村遺跡［冨川努 2004］の13軒，上ノ原遺跡［大川清他 1992］の10軒，殿山Ⅰ遺跡［吉岡秀範他 1995］の21軒など，10軒を超える集落が出現した点が注目される。このように，栃木県地域では後期前半段階で急激に減少した後に，後期後半段階に急増している。なお，当地域の後期終末から古墳時代初頭の段階には再び竪穴建物数が急減することを付け加えておく。

❸……千葉県北部地域における弥生時代中期から後期の遺跡数と竪穴建物数の推移

ここでは，千葉県北部地域，とくに印旛沼沿岸地域における中期後半から後期後半にかけての遺跡数と竪穴建物数の推移について検討を行う（表2，図2・3）。なお，竪穴建物の時期を決定する

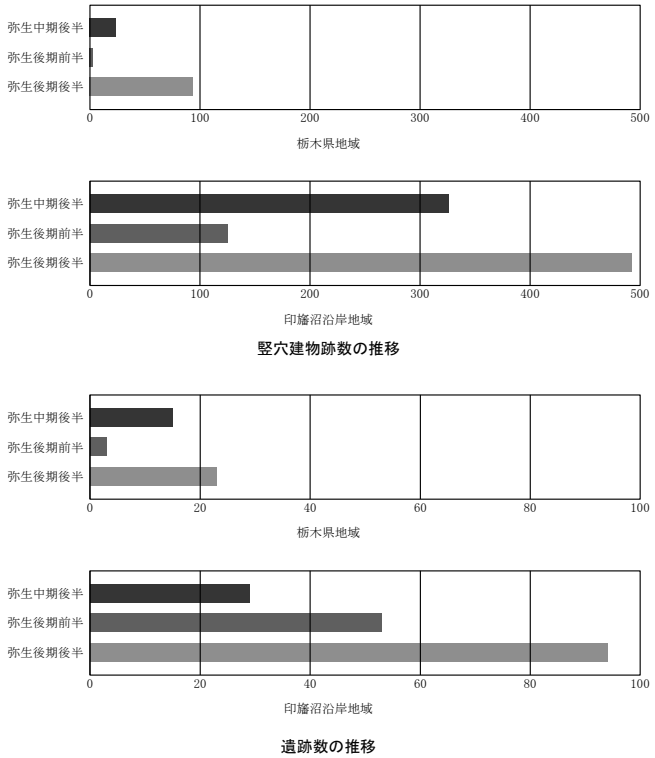
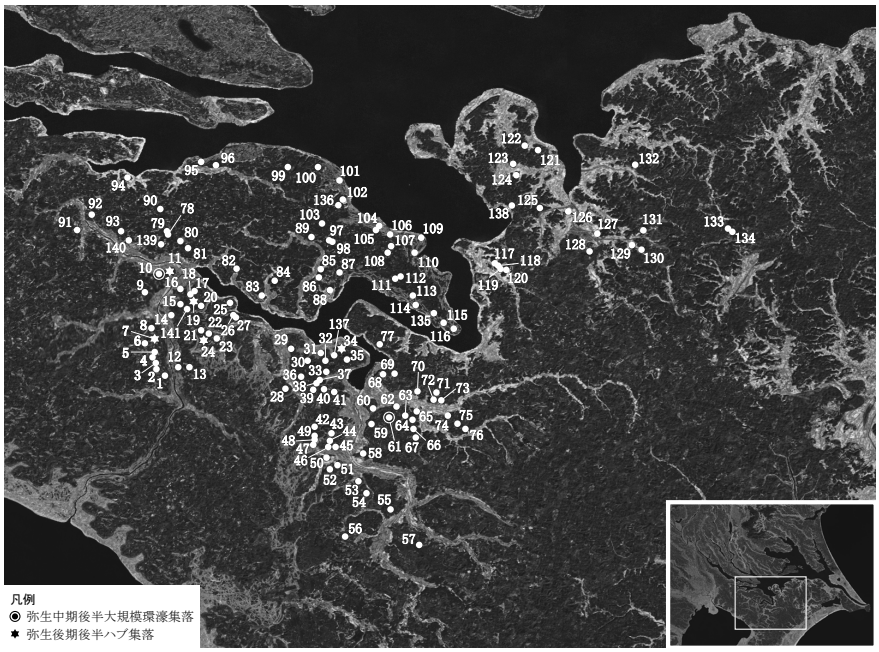
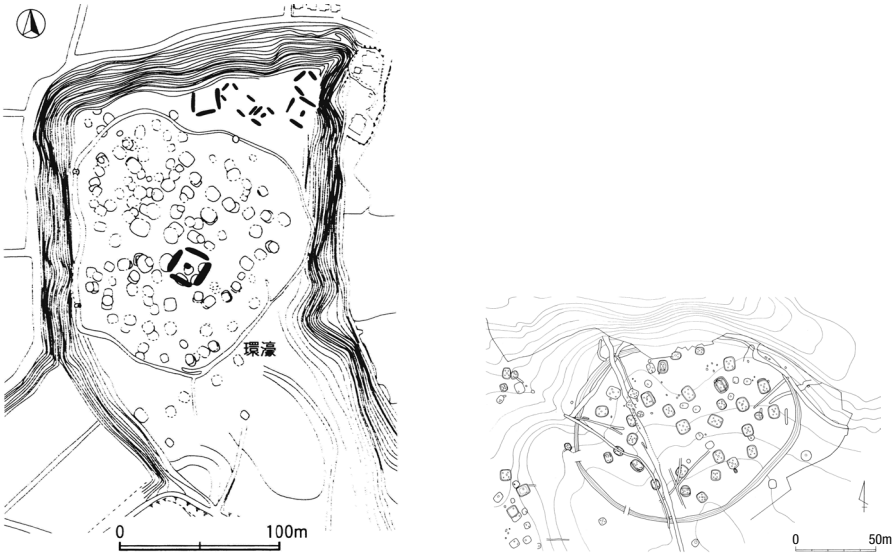


図2　栃木県地域と印旛沼沿岸地域の遺跡数と竪穴建物数の推移



1. 上ノ山遺跡 2. 川崎山遺跡 3. 白幡前遺跡 4. 井戸向遺跡 5. 北海道遺跡 6. ヲサル山遺跡 7. 権現後遺跡 8. 麦丸宮前上遺跡 9. 間見穴遺跡 10. 田原窪遺跡 11. 道地遺跡 12. 浅間内遺跡 13. 村上込ノ内遺跡 14. 蛸池台遺跡 15. 大山遺跡 16. 逆水遺跡 17. 境堀遺跡 18. 向境遺跡 19. 栗谷遺跡 20. 上谷遺跡 21. 阿蘇中学校東側遺跡 22. 堂の上遺跡 23. 上高野白幡遺跡 24. 平沢遺跡 25. おおびた遺跡 26. 南谷遺跡 27. 先崎西原遺跡 28. 飯合作遺跡 29. 臼井台大名宿遺跡 30. 臼井南遺跡 31. 臼井小笹台遺跡 32. 間野台・古屋敷遺跡 33. 新畑遺跡 34. 江原台遺跡 35. 曲輪ノ内遺跡 36. 生谷遺跡 37. 生谷間野遺跡 38. 生谷境堀遺跡 39. 生谷新畑遺跡 40. 吉見台遺跡 41. 臼井屋敷跡 42. 鶴口遺跡 43. 北ノ作遺跡 44. 馬場№1 遺跡 45. 嶋越遺跡 46. 館ノ山遺跡 47. 棒山・呼戸遺跡 48. 小屋ノ内遺跡 49. 御山遺跡 50. 入ノ台第 2 遺跡 51. 西向井遺跡 52. 相ノ谷遺跡 53. 郷野遺跡 54. 権現堂遺跡 55. 坂戸長道遺跡 56. 軽沢遺跡 57. 宮内井戸作遺跡 58. 太田長作遺跡 59. 太田用替遺跡 60. 向原遺跡 61. 六崎大崎台遺跡 62. 棒作遺跡 63. 六崎外出遺跡 64. 六崎貴舟台遺跡 65. 石川阿ら地遺跡 66. 城番塚遺跡 67. 城次郎丸遺跡 68. 佐倉城跡 69. 海隣寺於茶屋遺跡 70. 鏑木諏訪尾余遺跡 71. 高岡大福寺遺跡 72. 高岡谷津遺跡 73. 高岡大山遺跡 74. 八木山ノ田遺跡 75. 八木蒲田谷津遺跡 76. 八木宇廣遺跡 77. 岩名町前遺跡 78. 白井谷奥遺跡 79. 武西近隣遺跡 80. 鳴神山遺跡 81. 船尾白幡遺跡 82. 松崎Ⅳ遺跡 83. トヶ前遺跡 84. 六反目遺跡 85. 滝尻遺跡 86. 古山遺跡 87. 鎌苅遺跡 88. ちぼろく遺跡 89 向辺田遺跡 90. 一本桜南遺跡 91. 復山谷遺跡 92. 神々廻宮前遺跡 93. 谷田木曽地遺跡 94. 向台Ⅱ遺跡 95. 曽谷窪遺跡 96. 天神台遺跡 97. 弐卜込遺跡 98. 角田台遺跡 99. 馬込遺跡 100. 駒形北遺跡 101. 小林遺跡 102. 宮内遺跡 103. 天王台西遺跡 104 株木遺跡 105. 長原遺跡 106. 浅間古墳 107. 大谷遺跡 108. 堀尻第 2 遺跡 109. 家老地遺跡 110. 立田台第 2 遺跡 111. 山崎遺跡 112. 山田諏訪遺跡 113. 井ノ崎台遺跡 114. 平賀山ノ下 10 号墳 115. 仲ノ台遺跡 116. 一ノ台遺跡 117. 台方宮代遺跡 118. 船形手黒遺跡（船形手黒 1 号墳含む）119. 台方下平Ⅰ遺跡 120. 台方下平Ⅱ遺跡 121. 南羽鳥中軸第 1 遺跡 122. 南羽鳥谷津堀遺跡 123. 南羽鳥タダメキ第 2 遺跡 124. 上福田小橋遺跡 125. 松崎白子遺跡 126. 押畑子の神城跡 127. 関戸谷津之台遺跡 128. 東松原古墳 129. 小菅法華塚遺跡 130. 小菅三ツ塚遺跡 131. 長田和田遺跡 132. 長山遺跡 133. 東峰御幸畑西遺跡 134. 東峰御幸畑東遺跡 135. 駒込遺跡 136. 天王前遺跡 137. 江原埜谷遺跡 138. 大竹遺跡群Ⅲ 139. 向井新田遺跡 140. 谷田木曽地遺跡 141. 役山東遺跡

図３　印旛沼沿岸地域の遺跡分布図



六崎大崎台遺跡　　田原窪遺跡

図４　弥生時代中期後半における印旛沼沿岸地域の環濠集落（S=1/5000）

表２　印旛沼沿岸地域における竪穴建物の集計結果（１）

番号	所在地	遺跡名	竪穴建物跡総数	時期比定竪穴建物跡数	弥生中期後半	弥生後期前半	弥生後期後半	弥生中期後半～弥生後期前半	弥生後期前半～弥生後期後半	弥生後期後半～弥生終末期
1	八千代市	上ノ山	5	3		2	1		2	
2	八千代市	川崎山	27	10			10		13	4
3	八千代市	白幡前	18	5		4	1			13
4	八千代市	井戸向	6	4		2	2			2
5	八千代市	北海道	1	0					1	
6	八千代市	ヲサル山	7	4			4			3
7	八千代市	権現後	73	27			27		28	18
8	八千代市	麦丸宮前上	4	3		2	1		1	
9	八千代市	間見穴	13	8		3	5		3	2
10	八千代市	田原窪	49	49	49					
11	八千代市	道地	62	34		4	30		5	23
12	八千代市	浅間内	18	13		2	11		5	
13	八千代市	村上込の内	12	1		1			11	
14	八千代市	蛸池台	1	1	1					
15	八千代市	大山	2	2			2			
16	八千代市	逆水	5	1			1		4	
17	八千代市	境堀	22	10		2	8		12	
18	八千代市	向境	1	1			1			
19	八千代市	栗谷	95	44	5	6	33		50	1
20	八千代市	上谷	60	26		4	22		32	2
21	八千代市	阿蘇中学校東側	18	7			7		11	
22	八千代市	堂の上	7	1			1		6	
23	八千代市	上高野白幡	5	5	5					
24	八千代市	平沢	33	24			24		9	
25	八千代市	おおびた	1	1			1			
26	八千代市	南谷	1	1			1			
27	佐倉市	先崎西原	8	3			3		5	
28	佐倉市	飯合作遺跡	41	6		3	3		35	
29	佐倉市	臼井台大名宿	1	0					1	
30	佐倉市	臼井南	12	6		1	5		6	
31	佐倉市	臼井田小笹台	1	1			1			
32	佐倉市	間野台・古屋敷	10	4		4			6	
33	佐倉市	新畑	6	4		2	2		2	
34	佐倉市	江原台	93	41		5	36		52	
35	佐倉市	曲輪ノ内	3	1		1			2	
36	佐倉市	生谷	14	6			6		8	
37	佐倉市	生谷間野	12	3		3			9	
38	佐倉市	生谷境堀	7	2			2		5	
39	佐倉市	生谷新畑	2	2			2			
40	佐倉市	吉見台	60	21	1	6	14		39	
41	佐倉市	臼井屋敷跡	1	0					1	
42	四街道市	鶴口	1	1			1			
43	四街道市	北ノ作	1	1			1			
44	四街道市	馬場№-1	1	0				1		
45	四街道市	嶋越	1	1	1					
46	四街道市	館ノ山	4	1			1		3	
47	四街道市	棒山・呼戸	1	0					1	
48	四街道市	小屋ノ内	8	1		1			7	
49	四街道市	御山	1	0					1	
50	四街道市	入ノ台第２	2	2	1		1			
51	四街道市	西向井	2	2			2			
52	四街道市	相ノ谷	5	5	5					
53	四街道市	郷野	10	10	10					
54	四街道市	権現堂	3	1		1			2	
55	佐倉市	坂戸長道	25	8			8		17	
56	四街道市	軽沢	6	4	3		1		2	
57	佐倉市	宮内井戸作	4	1			1		3	
58	佐倉市	太田長作	12	12	10	2				
59	佐倉市	太田用替	1	1	1					
60	佐倉市	向原	49	4		1	3		45	
61	佐倉市	六崎大崎台	195	168	153	5	10		27	

表２　印旛沼沿岸地域における竪穴建物の集計結果（2）

番号	所在地	遺跡名	竪穴建物跡総数	時期比定竪穴建物跡数	弥生中期後半	弥生後期前半	弥生後期後半	弥生中期後半～弥生後期前半	弥生後期前半～弥生後期後半	弥生後期後半～弥生終末期
62	佐倉市	棒作	1	1	1					
63	佐倉市	六崎外出	2	1	1				1	
64	佐倉市	六崎貴舟台	8	5			5		3	
65	佐倉市	石川阿ら地	4	1			1		3	
66	佐倉市	城番塚	1	1			1			
67	佐倉市	城次郎丸	4	4			4			
68	佐倉市	佐倉城跡	1	0					1	
69	佐倉市	海隣寺於茶屋	4	0					4	
70	佐倉市	鏑木諏訪尾余	6	5			5		1	
71	佐倉市	高岡大福寺	11	7	2	1	4		4	
72	佐倉市	高岡谷津	8	2			2		6	
73	佐倉市	高岡大山	26	24	5	2	17		2	
74	佐倉市	八木山ノ田	7	7	7					
75	佐倉市	八木蒲田谷津	1	1		1				
76	佐倉市	八木宇廣	4	4		4				
77	佐倉市	岩名町前	3	3	1	2				
78	印西市	白井谷奥	1	1		1				
79	印西市	武西近隣	5	4		1	3		1	
80	印西市	鳴神山	9	7		7			2	
81	印西市	船尾白幡	20	11		2	9		9	
82	印西市	松崎Ⅳ	6	3		2	1		3	
83	印西市	トヶ前	12	5		3	2		7	
84	印西市	六反目	1	1			1			
85	印西市	滝尻	1	1			1			
86	印西市	古山	2	2		1	1			
87	印西市	鎌苅	4	0					4	
88	印西市	ちぼろく	5	3			3		2	
89	印西市	向辺田	12	5		3	2		7	
90	白井市	一本桜南	2	2			2			
91	白井市	復山谷	1	1			1			
92	白井市	神々廻宮前	2	0						2
93	白井市	谷田木曽地	1	0					1	
94	白井市	向台Ⅱ	8	4			4		3	1
95	印西市	曽谷窪	5	0					5	
96	印西市	天神台	26	14			14		12	
97	印西市	弐ト込	3	1		1			2	
98	印西市	角田台	14	7		5	2		7	
99	印西市	馬込	5	1			1		4	
100	印西市	駒形北	2	1			1		1	
101	印西市	小林	1	1		1				
102	印西市	宮内	5	4		3	1		1	
103	印西市	天王台西	1	1			1			
104	印西市	株木	2	0					2	
105	印西市	長原	18	13		1	12		5	
106	印西市	浅間古墳	3	3			3			
107	印西市	大谷	4	3			3		1	
108	印西市	堀尻第２	2	1			1		1	
109	印西市	家老地	4	4		3	1			
110	印西市	立田台第２	6	4		1	3		2	
111	印西市	山崎	1	1	1					
112	印西市	山田諏訪	1	0					1	
113	印西市	井ノ崎台	9	4			4		5	
114	印西市	平賀山ノ下 10 号墳	1	1			1			
115	印西市	仲ノ台	7	6			6		1	
116	印西市	一ノ台	9	7		1	6		2	
117	成田市	台方宮代	1	0					1	
118	成田市	船形手黒遺跡	4	3	2	1			1	
119	成田市	台方下平Ⅰ	22	10	6	1	3		12	
120	成田市	台方下平Ⅱ	12	12	12					
121	成田市	南羽鳥中軸第１	4	3			3		1	
122	成田市	南羽鳥谷津堀	12	7	2		5		3	2

表２　印旛沼沿岸地域における竪穴建物の集計結果（３）

番号	所在地	遺跡名	竪穴建物跡総数	時期比定竪穴建物跡数	弥生中期後半	弥生後期前半	弥生後期後半	弥生中期後半～弥生後期前半	弥生後期前半～弥生後期後半	弥生後期後半～弥生終末期
123	成田市	南羽鳥タダメキ第２	28	23	18	1	4		5	
124	成田市	上福田小橋	2	2	2					
125	成田市	松崎白子	2	1	1				1	
126	成田市	押畑子の神城跡	2	2	1		1			
127	成田市	関戸谷津之台	38	30	19		11	1	6	1
128	成田市	東町松原古墳	3	2		2				1
129	成田市	小菅法華塚	5	2		1	1		3	
130	成田市	小菅三ツ塚	1	1			1			
131	成田市	長田和田	24	19			19		5	
132	成田市	長山	1	1			1			
133	成田市	東峰御幸畑西	17	11		3	8		6	
134	成田市	東峰御幸畑東	4	0					4	
135	印西市	駒込	1	0					1	
136	印西市	天王前	3	1			1		2	
137	佐倉市	江原埜谷	5	3			3		2	
138	成田市	大竹遺跡群Ⅲ	2	1			1		1	
139	印西市	向新田	3	2			2		1	
140	印西市	谷田木曽地	8	4		2	2		4	
141	八千代市	役山東	3	2		1	1		1	
合計			**1668**	**943**	**326**	**125**	**492**	**2**	**648**	**75**

上で小倉淳一［小倉 1996］，小林嵩［小林 2015］の編年観を参照した。具体的には，中期後半が小倉によるＥＴ Ⅰ～Ⅲ期，後期前半が小林によるⅠａ～Ⅱ期，後期後半が小林によるⅢ～Ⅳ期とした。

中期後半については，29 遺跡と当該期に比定された竪穴建物 326 軒が確認された。環濠集落である佐倉市六崎大崎台遺跡と八千代市田原窪遺跡だけで時期比定された竪穴建物が 202 軒もあり（図 4），当該期に比定された竪穴建物の約 62 % をこの 2 遺跡だけで占める。成田市南羽鳥タダメキ第 2 遺跡や同市関戸谷津之台遺跡でもやや多くの竪穴建物が確認されたが，その他の遺跡では 10 軒から数軒程度の竪穴建物が確認されたのみである。

後期前半では，53 遺跡と当該期に比定された竪穴建物 125 軒が確認された。中期後半とくらべて遺跡数は倍近くに増加するが，竪穴建物は逆に 1/3 近くまで激減する。全ての遺跡で時期比定された竪穴建物は 10 軒未満にとどまり，中期後半の六崎大崎台遺跡や田原窪遺跡のような規模の大きい集落は認められない。

後期後半では，94 遺跡と当該期に比定された竪穴建物 492 軒が確認された。後期前半とくらべて遺跡数は大幅に増加し，竪穴建物は 4 倍近くもの増加が認められる。各遺跡の時期比定された竪穴建物の数を見ると，八千代市栗谷遺跡や佐倉市江原台遺跡のような 30 軒以上になる大規模な遺跡から，数軒程度の小規模なものまで認められる。

以上のように，中期後半とくらべて後期前半は遺跡数が増加することが確認された。後期前半に遺跡数が増加することは，小林嵩によって既に指摘されており［小林 2018］，このことは今回の分析でも追認された。一方で，竪穴建物については，大規模環濠集落への極端な集中が中期後半で確認されたのに対し，後期前半になると一転して各遺跡で 10 軒未満しか見られなくなり，後期後半になると大規模な遺跡が見られるとともに再び遺跡間での較差が生じることが，今回の検討によって明らかとなった。なお，後期前半から後期終末にかけて時期比定できなかった竪穴建物が 723 軒にもなったことから，後期前半から後期前半の実際の竪穴建物数はさらに多いことは間違いない。

❹……弥生時代中後期における東部関東地域の特殊性と社会変動

（1）栃木県地域における小規模分散型居住システムの問題

上述のように，栃木県地域と千葉県北部地域という東部関東地域における中期後半以降の竪穴建物数の変遷についてみてきたが，以下ではこうした竪穴建物数の変遷から表出した問題について若干の検討を行うことにしたい。

まず，栃木県地域と千葉県北部地域の両者を比較してわかることは，中期後半から後期後半にかけて栃木県地域における竪穴建物数が圧倒的に少ないことである（表 1・図 1）。栃木県地域と千葉県北部地域の両方において，全体的な推移として，後期前半段階に急激に減少し，後期後半段階に急増するという傾向は一致するものの，栃木県地域の場合は数の面で圧倒的に少なすぎる。一体，こうした竪穴建物数が圧倒的に少ない状況はどうして生じたのであろうか。この原因は，単に発掘調査がなされていないというだけではなく，当該時期の竪穴建物自体の特徴によると考える。

縄文晩期以降，関東地方における集落数は激減し，同時に竪穴建物数も減少する。むしろ，明確な集落はみえなくなった，といっても過言ではないであろう。この原因について筆者の一人である小林は，縄文時代晩期以降に，竪穴建物の構築の際に，掘り込み深度の面で「浅床住居」と「深床住居」の二種が存在する点にあると考えた［小林$_{青}$ 2004］。こうした動向は，後晩期における掘立柱建物や平地式建物の増加とも関連したものであると考える。このうち「浅床住居」は簡易的に造られた竪穴建物で，ほとんど掘り込みをもたないものが多く，表土を簡易的に整地したものも含んでいる。こうした建物構造は，定着性が低く，移動に対応したものであろう［小林$_{青}$ 2004］。このような建物構造は，北関東西部では中期前半頃まで続き，集落構造をみると小規模かつ分散化傾向が顕著であり，その背景に雑穀などの農耕開始を想定した［小林$_{青}$ 2004］。

その後，レプリカ法による穀物の圧痕資料が増加し，特に晩期後半の浮線文土器段階以降にアワ・キビが出現することが明らかとなり［設楽ほか 2014］，筆者の予測が，圧痕資料によって実証された。畠作において，肥料などの対応ができなかった先史時代においては，特にアワ・キビの場合連作が難しく，山林を焼く焼畑か，もしくは耕作地を頻繁に移動していく方法がとられたと考えたわけである。そして，弥生時代前期末頃以降は，こうした集落は再葬墓造営集団によっても営造され続け，浅床住居で小規模かつ分散化傾向の居住システムがおそらく中期中葉段階頃まで北関東西部地域にはみられたと考えた。そして，同じように再葬墓造営集団が存在する北関東東部地域も同じような居住システムのもとで生活していたと推測するのである。

こうした再葬墓造営集団による浅床住居で小規模かつ分散化傾向の居住システムは，耕作地を頻繁に移動していくこととも大きく関係し，集落の規模と定着性に大きく影響したと考えられる。

比較的定着性の高い集落の場合は，日常の道具や家財道具などについて，大型品や数において移動性の高い集落よりも勝っていると予測される。北関東西部の特に安中市一帯の前期末から中期前半段階の再葬墓造営集団の浅床住居で小規模かつ分散化傾向の居住システムの注連引原遺跡などの集落では，住居は 2 軒ほどで，家財道具をみると石皿の破片転用品をわずかに利用するなど，生活

用具の保有量が少ないことを意味し，移動性に富む可搬性・携帯性の高い道具類を中心にわずかに有する状態で廃棄されたと想定する［小林$_{青}$ 2004］。

一方で，同じ再葬墓造営集団である中野谷原遺跡は，竪穴建物は18軒と急増している。それまでの遺跡は，いずれも2～3軒程度の小規模集落であったが，一気に集住度が増している。中野谷原遺跡の竪穴建物群は南北に東西方向の2列に配置されており，それぞれの竪穴建物の脇に大きめの貯蔵穴が付設されている。竪穴建物はいずれも「浅床住居」である。本遺跡からは，石鏃が多数出土する。また，中野谷原遺跡検出の貯蔵穴は深度が深く基数も多い。こうした貯蔵穴のような土坑の規模を各遺跡で比較すると，新しい段階になるにつれて深度が深くなっていく［小林$_{青}$2019］。

こうした現象について単純に考えれば，収穫物の増加とともにより貯蔵量が増加したことを意味し，同時に集落の定着性の向上を意味していると考える。また，注連引原遺跡に比べ，中期前半の中野谷原遺跡のほうが，石鏃，打製石斧などの出土量が増加し，凹み石や石皿のように，可搬性の低い大形石器の急増は，先ほど推定したように小規模で移動性に富む段階からやや定着性の高い段階に移行したことを示している。

このように北関東西部においては，中期前半でも後半頃に再葬墓造営集団の集落の特徴は，同一地点に集住化がはじまり，竪穴建物が増加していた。また，生活用具の保有量が増加（石鏃などの遺物量が急増）する段階でもあると考える。この段階には，アワ・キビ農耕に加えイネの存在が明らかになっており，雑穀に加え陸稲の利用が開始されていた可能性を示唆する。

このように，再葬墓造営集団の居住システムは，基本的にアワ・キビ農耕をするにあたり，連作が難しいために耕作地を移動する必要性に対処するため，短期的で移動性の高い居住システムであった可能性が高い。このような小規模で分散，移動性の高い集落であったことは，再葬墓造営集団の形成上大きな要因となった。再葬墓造営集団は，この移動性の高さにより分散した結果，共通の祖先の系譜で繋がる集落同士が，特定の場所に再葬墓を造営し，掘り起こした遺骨を収納した土器棺を持ち寄り，同じ出自系譜に連なる集団が結集し造墓した。その後，中野谷原遺跡のように次第に人口が集中するようになり，農耕を継続していった可能性が高い。以上のようなケースは，アワ・キビ農耕とおそらく一部陸稲などの利用をしつつも，大規模な灌漑による水稲耕作には踏み切らず，緩やかに社会が進化していく状況があったことを示している。

こうした北関東西部の特徴から栃木県地域の様相をみると，中期前半はもとより，中期後半から後期終末にいたるまで，1集落で10軒を超えるのはわずかに数件しかなく，単純な比較ではあるが栃木県地域の場合は，弥生時代を通じて北関東西部の中野谷原遺跡段階程度にまで到達していたかどうか，という状況であったと推測されるのである。北関東西部では，再葬墓造営集団の居住システムが瓦解した後，中期後半段階に本格的な水稲耕作を導入し人口の集住と増加，そして集落規模の増大へと変化するが，栃木県地域においては再葬墓造営集団の小規模かつ分散化傾向の居住システムをそのまま維持し続けたように見える。

こうした背景には，栃木県地域では先にみたように弥生時代の集落の立地が，中期から後期まで一貫して沖積低地から比高差が大きい台地上に立地することとも関係する可能性が高い。栃木県地域で，最も標高の高い竪穴建物遺跡は，中期後半の上山遺跡［塙ほか 1974］の標高330 mで，今市扇状地の扇部分に位置する。後期の最高標高遺跡は堀越遺跡［芹澤 2005］で荒井台地（田原面）の

台地最低位面の標高 217 m に位置する。沖積低位面との比高はそれぞれ 1 m と 8 m である。中期の最高比高は 15 m の津村遺跡［永岡 2005］，最低比高は 0.5 m の磯岡北遺跡［藤田ほか 2003］である。また，中期遺跡の平均比高は約 5.2 m である。

これに対して，後期の最高比高は 20 m の柳久保遺跡［塙ほか 1972］，最低比高は 1 m の堀越遺跡［芹澤 2005］である。また，後期遺跡の平均比高は約 5.7 m である。柳久保遺跡は，独立丘陵の根本山（165 m）の南西突端上に位置し，後期にあっても高地性を示している。このように，相対的に低地へ降りてくる傾向は明らかであるが，再葬墓造営集団の生業であったアワ・キビ農耕が主体であったことを示しており，これに加え小規模な集落であっても，やや低地への進出傾向が認められることを評価すれば，本格的な灌漑システムをもたない状況下でのイネ栽培をはじめていた可能性を考えておきたい。

（2）千葉県北部地域における地域社会構造の変遷

中期後半は，大規模な環濠集落である六崎大崎台遺跡と田原窪遺跡の 2 遺跡に人々が集住していたことが上述の結果から見て取れる。とくに，153 軒もの竪穴建物が確認された六崎大崎台遺跡は，印旛沼沿岸地域で宮ノ台式土器を使用する人々によって最も早く営まれた集落であり，地域開発の拠点として中心的役割を担ったとされている［小倉 2016］。さらに，六崎大崎台遺跡からは鉄器や勾玉といった資料も出土しており，物資流通の拠点という評価もなされている［小林嵩 2016］。これらのことから，開発拠点であり，物資流通のハブでもあった六崎大崎台遺跡を中心とした居住システムが印旛沼沿岸地域に構築されていたと考えられよう。なお，田原窪遺跡については，発掘調査報告書が刊行されておらず，詳細は不明なため，その性格について言及することはできない。

後期前半は，中期後半と比べて，集落数が倍近く増加したにもかかわらず，いずれの集落も時期比定された竪穴建物が 10 軒にも満たない。さらに，六崎大崎台遺跡の環濠も当該期には完全に埋まったとされていることから［小倉 2016］，大規模環濠集落である六崎大崎台遺跡を中心とした居住システムが解体し，環濠集落に集住していた人々が分散して小規模集落を多数林立させる新たな居住システムへと転換したと考えられよう。加えて，集落間に環濠や規模，竪穴建物数といった点で較差が認められないことから，後期前半は集落間の等質性が高い居住システムであったと考えられる。

ところで，中期後半と後期前半をくらべると，土器と墓制は大きく異なっており，まるで集団が交代したようにも見える。中期後半以降，印旛沼沿岸地域の土器には大きく分けて 2 つの系統があり，1 つは「南関東系」，もう 1 つは「東関東系」である（図 5）。中期後半は「南関東系」が主流の印旛沼西岸地域と南岸地域，「南関東系」と「東関東系」が拮抗，あるいは「東関東系」が主流の印旛沼東岸地域とに分けられる。ところが，後期前半になると印旛沼沿岸地域全域で「東関東系」が主流となり，「南関東系」は微量しか出土しなくなる。一方，墓制に目を向けると，中期後半の印旛沼西岸地域および南岸地域は方形周溝墓が主流だが，後期前半になると印旛沼沿岸地域全域で方形周溝墓は姿を消し，小児用と考えられる土器棺墓が少数認められるにとどまるようになる（図 6）。このように，土器と墓制双方の変化は劇的なように見え，しかも居住システムの変化も相まって，まるで集団が交代したようにも思われる。しかし，そう解釈するのは難しいと言わざるをえない。

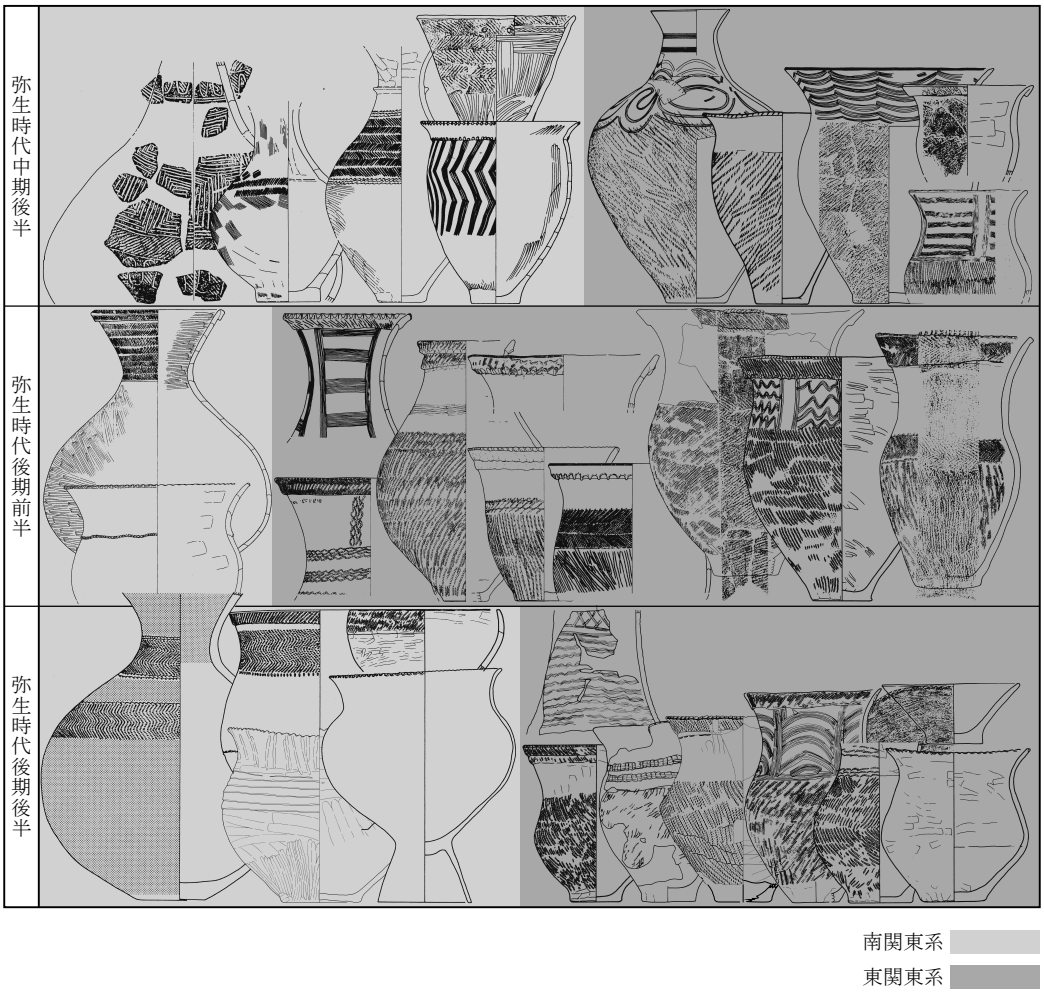
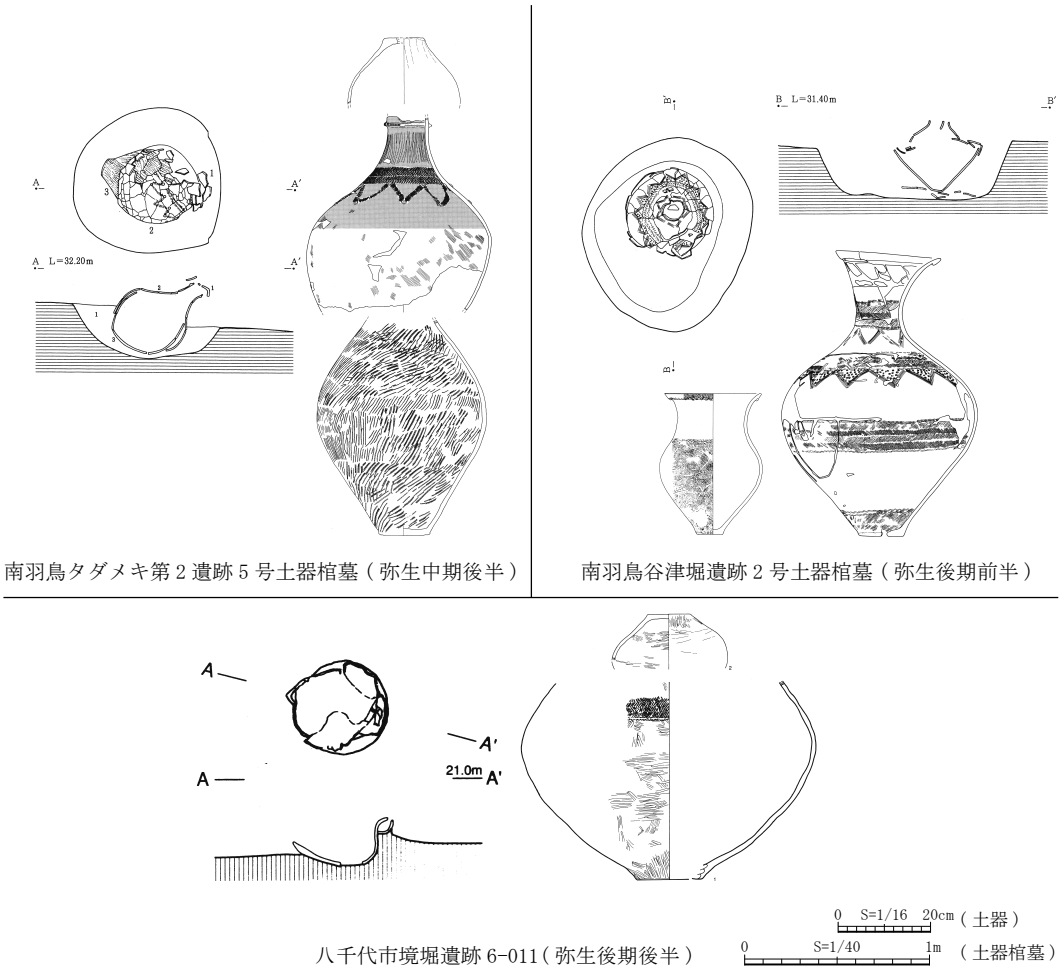


図5　印旛沼沿岸地域における土器の変遷観（スケール不同）

先ほど触れたように，中期後半の印旛沼東岸地域には「東関東系」が多数出土する遺跡があり，そのうちの１つである成田市南羽鳥タダメキ第２遺跡では小児用土器棺墓に加えて方形周溝墓も確認されている（図7）。さらに，南羽鳥タダメキ第２遺跡で確認された方形周溝墓や土器棺墓に時期差は認められないことから，これらは併存していたと考えざるをえず，竪穴建物，方形周溝墓，土器棺墓の配置に規則性や排他性も認められず，なにより南羽鳥タダメキ第２遺跡第５号土器棺墓からは「東関東系」と「南関東系」が合わさって出土していることから（図6），２つの集団が併存していたと考えることはできない。したがって，この集落では１つの集団が異なる系統の土器を使い，異なる２つの墓制を採用していたと考えざるをえない。また，「南関東系」が中心の印旛沼南岸地域の遺跡で少量ながら「東関東系」の出土も見られることから，「東関東系」と小児用土器棺墓が中期後半の印旛沼沿岸の各地に浸透し始めていたことがわかる。こうした流れがより強まった結果が後期前半の印旛沼沿岸地域全域における「東関東系」と小児用土器棺墓の定着であって，後期前半に突然新たな集団が印旛沼沿岸地域に現われたのではないと考えられる。

後期後半は，後期前半とくらべて，集落数が大幅に増加し，時期比定された竪穴建物の数も４倍



南羽鳥タダメキ第 2 遺跡 5 号土器棺墓（弥生中期後半）　南羽鳥谷津堀遺跡 2 号土器棺墓（弥生後期前半）

八千代市境堀遺跡 6-011（弥生後期後半）

図6　弥生時代中期後半～後期後半の土器棺墓

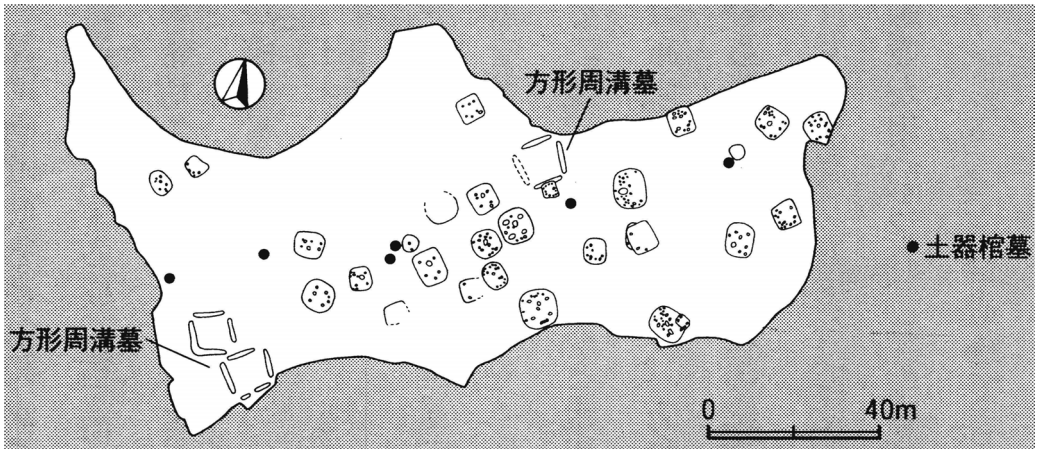


図７　成田市南羽鳥タダメキ第２遺跡遺構分布図

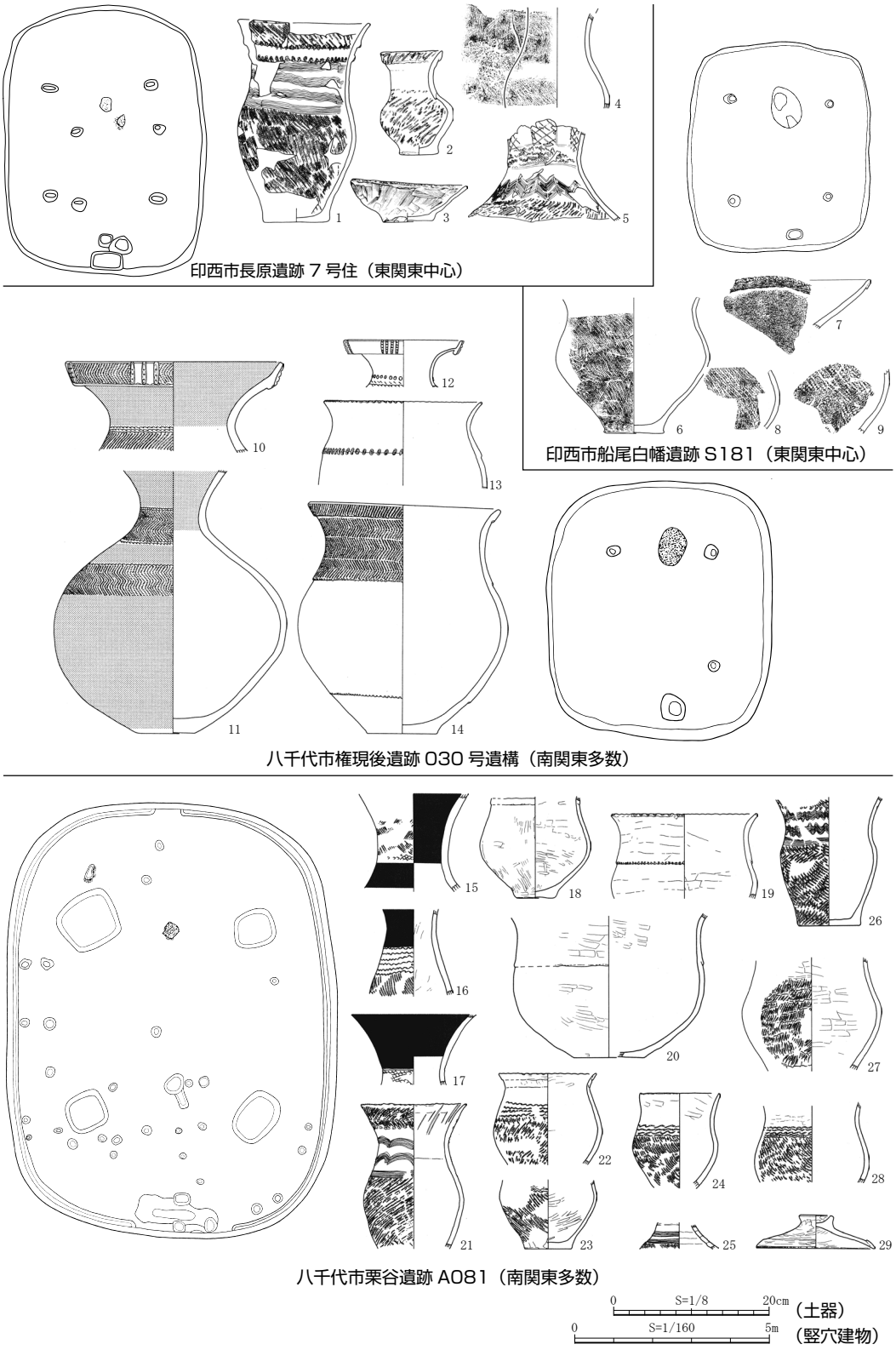


図８　印旛沼沿岸地域における後期後半の土器と竪穴建物

以上になり，時期比定された竪穴建物が 30 軒を超える大規模な集落から数軒程度の小規模なものまで様々な規模の集落が数多く存在した。とくに，大規模集落と時期比定された竪穴建物が 10 ～ 30 軒になる中規模集落の一部では「南関東系」が「東関東系」と拮抗するほど多数出土する傾向にある（図 8-10 ～ 20）［小林嵩 2018］。「東関東系」が圧倒的に多く，「南関東系」は搬入品とおぼしきものが微量出土するにすぎなかった後期前半とは対照的である（図 5）。しかも，八千代市平沢遺跡 e 地点で出土した「南関東系」の壺・浅鉢・高坏の多くは製作技法に加え，胎土にシャモットが含まれている点まで故地と酷似していることから搬入品と考えざるをえず，それはかなりの数になる可能性がある［八千代市教育委員会教育総務課文化財班 2017b］。もちろん，胎土が「東関東系」と近しいものもあることから，全てが搬入品というわけではなく，印旛沼沿岸地域に移住してきた土器製作者が製作した土器も一定数存在するものと思われる。ただし，注意しなくてはならないのは，こうした現象は人々が集団となって移住した結果ではないという点である。なぜなら，「南関東系」の主たる分布域である東京湾沿岸地域で見られるような方形周溝墓は採用されていないからである。さらに，竪穴建物の形態に目を向けると，「東関東系」が中心の遺跡と「南関東系」が多く出土した遺跡の平面プランや炉，柱穴，貯蔵穴の配置を比較しても違いは認められない（図 8）。これらのことから，東京湾沿岸地域から集団が移住してきて故地の生活様式を持ち込んだとは考えられず，土器の搬入と土器製作者の移住によって「南関東系」は急速にその数を増やしたとするのが妥当であろう。なお，「南関東系」が急速に増加した集落がある一方で，小規模集落あるいは印西市長原遺跡のような一部の中規模集落では依然「東関東系」が中心であり，「南関東系」の出土は少数派にとどまる（図 8 -1 ～ 9）。このように，規模が拡大した集落にはヒト・モノが集中し，小規模集落とは異なる様相を呈するようになったことから，集落間較差のある居住システムへと変化したと言える。おそらく，規模が拡大した集落は小林が言うような地域における「物流拠点」［小林嵩 2018］あるいはハブ集落であり，これらの集落を通じて地域内の小規模集落は栃木県地域を介して入ってきたと思われる鉄器や，その他様々な物資を入手したものと思われる。なお，同じく大規模集落が形成されていた中期後半と後期後半の違いは，前者が六崎大崎台遺跡を中心とした居住システムを構築したのに対し，後者は複数の中・大規模ハブ集落が併存した点にある。

以上のように，千葉県北部地域では居住システムが頻繁に変化したことが明らかとなった。次に，こうした居住システムはどのような農業生産を基盤として成り立っていたのかを検討する。栃木県地域で述べたように，農業生産は土地への定着性に深くかかわり，居住システムの根幹でもあるからである。千葉県北部地域の後期は器種の様式的分化が不明瞭であり，樹枝状に広がる細い谷津沿いに集落が立地する傾向も強いことから，長らく畠作を中心とした農業生産が行なわれていたと考えられてきた［熊野 1985］。近年でも，千葉県北部地域の後期は比較的短期で廃絶されてしまう集落が多いことから，台地上での畠作を中心とした農業生産が行なれていたと考え，この農業生産方法によって集落は頻繁に移動したという解釈が小林によって提示されている［小林嵩 2018］。

しかし，近年行なわれた弥生後期土器を対象とした種子圧痕調査の結果は圧倒的にイネが多く，畠作物であるアワ・キビは非常に少ないというものであり，これまでの畠作中心史観に疑問を抱かせるものとなっている［設楽編 2019，轟 2019，轟・佐々木・那須・百原 2019］（表 4）。もちろん，小林が指摘するようにイネの圧痕由来が陸稲である可能性［小林 2018］も否定はできないため，[(2)] イ

表3　印旛沼沿岸地域の弥生時代中期後半を対象とした種子圧痕調査の結果

遺跡名	観察土器点数	観察土器重量(kg)	イネ	イネ？	キビ	不明種実	文献
栗谷遺跡	52	36.298	2				宮澤編 2003
関戸谷津之台	73	21.55	3	5			谷 1983
合計	125	57.848	5	5	0	0	

表4　印旛沼沿岸地域の弥生時代後期を対象とした種子圧痕調査の結果

遺跡名	観察土器点数	観察土器重量(kg)	系統	イネ	イネ?	キビ	不明種実	文献
栗谷	94	28.184	東関東系	1	2		1	蕨編 2001，宮澤・朝比奈編 2003
			南関東系	2		1	1	
上谷	53	17.488	東関東系	3		1		武藤編 2001，朝比奈編 2004・2005
			南関東系					
境堀	41	12.38	東関東系	8	3			宮澤編 2005
			南関東系					
権現後	98	40.095	東関東系	5				阪田編 1984
			南関東系	4			1	
平沢	3946	68.943	東関東系	16				森編 2011・2013，轟・林編 2018
			南関東系	5				
			系統不明	3				
阿蘇中学校東側	22	10.195	東関東系					朝比奈・藤原 1984
			南関東系	2		2		
関戸谷津之台	40	11.162	東関東系	2	1		1	谷 1983
			南関東系					
合計	4294	188.447		51	6	4	4	

ネの圧痕が多いことを理由に水稲耕作の存在を肯定することは根拠として弱い。しかしながら，印旛沼沿岸地域に近接する市川市道免き谷津遺跡からは後期に位置づけられる水田雑草の花粉が検出されたことから［酒井・百原・工藤・服部・島立 2015］，印旛沼沿岸地域においても水稲耕作が営まれていた可能性がある。そして，近世以降の事例となってしまうが，千葉県北部地域の谷津では湿田が広く営まれていたことがわかっており［奥西 2008］，水稲耕作に不向きな立地であることを理由に水稲耕作を行なっていなかったとするこれまでの畠作中心史観の根拠も崩れている。以上のことから，畠作を中心とした農業生産を行なっていたとするこれまでの見解には疑問を抱かざるをえず，状況証拠ではあるものの，水稲耕作による農業生産は行なっていたと考えるのが妥当ではないかと思われる。もちろん，キビといった畠作物の圧痕が確認されていること，千葉県北部地域には畠作に向いている広い台地平坦面があることから，畠作も行なっていた可能性は高い。したがって，後期の千葉県北部地域では水田と畠作の双方を行なっていたと考えるのがよいだろう。ただし，どちらがどの程度の比重を占めていたのかを現状の資料から明らかにすることは難しいと言わざるをえない。一方，後期と比べると検出数に大きな差があるが，中期後半の種子圧痕調査の結果もイネ

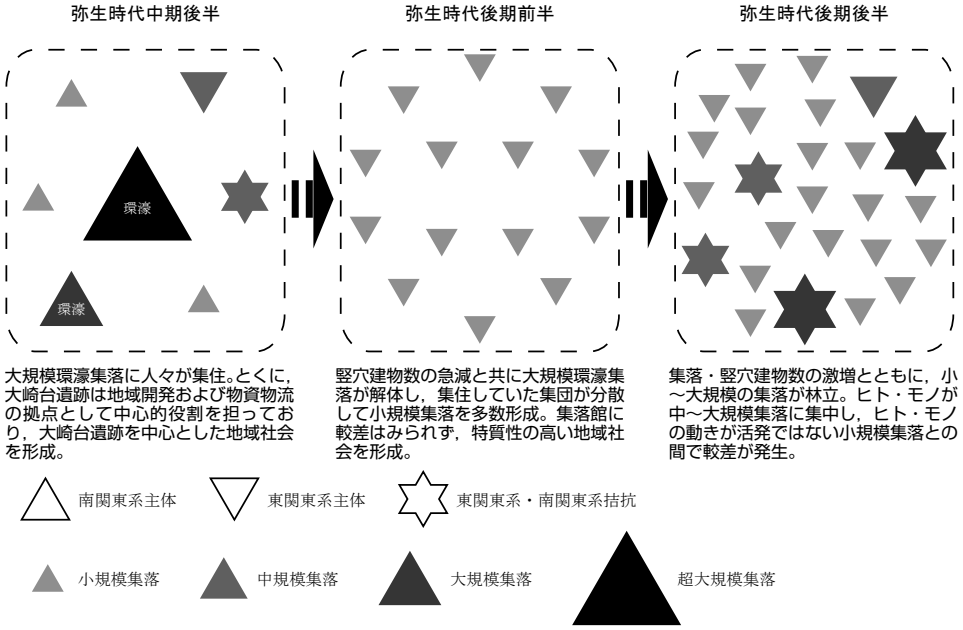


図9　印旛沼沿岸地域における居住システムの変遷

が多いこと（表 3），さらには田原窪遺跡で多量の炭化米が確認されていること［秋山 2003］から，中期後半も後期と同様に水稲耕作が行なわれていたものと思われる。畠作についてはキビやアワといった畠作物が確認されなかったため，その存否には言及できないが，東京湾西岸や相模湾沿岸域ではアワ・キビが確認されていることから［遠藤 2018］，将来的に確認されることは十分に想定されよう。

以上のように，中期後半から後期にかけての千葉県北部地域では土地への定着性が高い水稲耕作による農業生産が行われつつも，居住システムは頻繁に変化していたと考えられた（図 9）。このことから，これまで東部関東地域として一体的に捉えられがちであった栃木県地域と千葉県北部地域では異なる居住システムが営まれ，その要因として異なる農業生産が行われていたためだと考えられる。

（3）竪穴建物数の推移における増減現象の背景

本稿における東部関東地域における栃木県地域と千葉県北部地域での竪穴建物数の推移を見た場合，共通して後期前半段階と後期後半段階に変動がみられ，前者の段階で急減，そして後者の段階で急増するという現象が看取される。

こうした現象は，冒頭でも触れたように，汎列島規模での現象であり，そうなると真っ先に環境変動によるものと考えるべきであろう。 樹木の年輪の酸素同位体分析を進める中塚 武［中塚編 2020］によれば，まず，後期前半（AD 1 世紀）は，BC 1 世紀に湿潤化した気候が，一旦，乾燥化する時代であるという。しかし，単純な乾燥化ではなく，極度に乾燥する年と湿潤な年が，数年以内の周期で頻繁に入れ替わる時代であるとされる。これは，過去 2600 年の中でも，この時代にしか見られな

い極端な特徴であるという。当時の人々にとっても，そうした降水環境の極端な変化は，周期が短いと言う意味で認識可能だったと思われ，農業生産にとっては，極めて厄介であることから，それぞれの地域で，さまざまな対応がなされたとされる。

一方で，後期後半（AD 2 世紀）は，こうした数年周期で極端に降水量が変動する時代（平均すると乾燥傾向にある時代）が終息する代わりに，数十年周期での大きな降水量の変動が起きる時代（平均すると湿潤傾向にある時代）」であるとされる。

このように，環境変動に対する研究は酸素同位体比分析によって大きな進展を見ている。こうした酸素同位体比分析による気候変動と遺跡の動向を比較検討した研究はまだ少ないが，近畿を対象とした研究が若林邦彦と井上智博によって行われている。淀川流域を対象に比較検討を行った若林は，降水量変動と淀川右岸地域の低湿地遺跡の比率変化を対照させ両者に何らかの相関があることを論じた［若林 2018］。そして，後期から古墳時代の時期は湿潤期に相当し，この期間は列島規模の政治統合が進行する時期でもあることを指摘した。一方，河内平野における水田稲作の展開と気候変動を相関させた井上によれば，中期後半の紀元前 80 年～ 60 年頃に起こった急激な降水量増加をきっかけに，紀元前 1 世紀から紀元後 2 世紀にかけて，河内平野の水田遺構をもつ遺跡の多くで面積がほぼそろった耕作単位を整然と配置し，複雑な灌漑システムによって運営される新たな水田域のあり方が確立されていったとした［井上 2018］。そして井上は，水田経営にあたり，水田開発や危機管理を含めて耕作集団を統率し，内部の利害調整を行う指導者の存在が重要であったとし，この変化の要因を降水量変動に求めた。

以上のように，酸素同位体比分析から明らかとなった環境変動とその成果を組み込んだ近畿における研究を見てきた。それでは，このような一連の研究による分析結果及び解釈と，今回の東部関東地域の検討結果はどのように対応するであろうか。まず，東部関東地域では後期前半はともに竪穴建物数は急減し，中塚が指摘するように，農業生産にとっては，極めて悪い状態であったことが反映しているであろう。栃木県地域においては，本格的な水田稲作に移行していないが，アワ・キビ農耕が主体の地域でも同様に環境悪化の影響を受けていると考えられる。若林は具体的に本稿で問題とする後期前半期の竪穴建物数や遺跡数の減少と後期後半期における竪穴建物数や遺跡数の増加について言及していないものの，提示された図をみるかぎり大まかには本稿での検討と同じ傾向を示している。したがって，本稿で試みた分析結果は，列島規模で同じように生じた変化であったことが推測される。湿潤期は洪水などが多く降水量が多いわけであるから，当然ながら低湿地に立地する遺跡は相当のダメージを受けるわけであるが，先に述べたように栃木県地域の遺跡の多くは台地上に立地し，低湿地に立地する遺跡は極めて少ない。こうした点からみると，後期前半段階における気候変動と栃木県地域でみられた竪穴建物数や遺跡数の減少は，洪水に限定することなく正常ではない気候変動の影響によってアワ・キビ農耕が主体の生業に影響した可能性がある。しかし，遺跡は台地状に立地し，低湿地において小規模な水田を経営していた可能性もあり，この点は今後の検討で明らかにしなければならない。

一方，千葉県北部地域でも降水量の極端な変動は地域社会の再編を促した可能性がある。後期前半に等質性の高い小規模集落を林立させたのは，農業生産地を分散させつつ，集落間で力関係が極力生じない平等な居住システムを構築することによって，この環境変動に対応しようとしたためで

はないかとも考えられるからである。このように，環境変動によって居住システムの変化を余儀なくされた可能性がある点は千葉県北部地域も淀川流域や河内平野と共通するように思われるが，その対応方法は淀川流域や河内平野とは異なっていたようである。

次に，後期後半段階であるが，東部関東地域ではともに竪穴建物数は増加現象が認められる。ただし，栃木県地域では，数は増加したものの依然として集落の規模は小規模であり，千葉県北部地域における増加数とは比較できないほどに少ない。この差異は，一体どのような状況を示しているのであろうか。近畿の状況に比べて，まず栃木県地域においては当該時期に南関東地域などでみられる巨大な集落が存在しないという大きな差異がある。特に，大規模な人口の集中と周辺の小中規模の集落と繋がりつつ，地域の物資流通のハブとなるような遺跡は皆無である。すなわち，栃木県地域の後期後半段階は，他地域に比べて人口の集住化傾向，すなわち複数集落の統合がなされず，再葬墓造営集団以来の居住と生業のシステムを維持しつつ，ゆるやかに人口を増加させる地域であったと考える。その背景には，複数の地域が協業により水利灌漑施設を整備して経営し，あるいは水田経営での利害調整を行う強大な力を有する指導者が存在するよう社会ではなかったことが大きいであろう。

なお，東部関東地域でも，茨城県では，土浦市の原田遺跡のように 100 軒を超える大規模遺跡が存在しており［海老澤ほか 1999］，内陸の栃木県地域とは対照的な状況を示している。これは，海路を通じて，太平洋岸の西部地域と交流を進め，沖積低地の開発と水稲耕作を行っている可能性を示している。

一方，小規模集落とヒト・モノが集まる複数の中～大規模集落が併存する居住システムが千葉県北部地域に出現したことと，中塚が指摘する後期後半の環境変動がどのような関連していたのかは，現在のところよくわからないと言わざるをえないが，人口減少を伴うようなダメージを地域社会に及ぼしたとは考えがたい。なぜなら，後期前半と比べて竪穴建物と集落の数が激増しており，これは人口増加を反映したものと考えざるをえないからである。他方で，後期後半における竪穴建物の増加に対する解釈として，中塚は異なる可能性を提示している。当時の人々はそれぞれの環境に適した場所に住居や農地を構え，気候が変動すると，また新しい気候に適した場所に頻繁に移動を繰り返さざるを得なくなり，その結果，見かけ上の集落数が激増すると推測したことである［中塚 2018］。そうした地域もあったかもしれないが，今回対象とした栃木県地域と千葉県北部地域に限れば，土器編年や竪穴建物の切り合い関係といった考古学的現象からそうした現象を捉えられないため，この解釈を適用することは難しい。そのため，栃木県地域と千葉県北部地域における後期後半の集落と竪穴建物の増加を人口の増加と解釈した。

❺……おわりに

本論では，栃木県地域・千葉県北部地域における弥生社会の問題について検討を試みてきた。ここでは，本論の要点を整理しつつ今後の展望について若干述べることにする。

栃木県地域および千葉県北部地域ともに後期は環濠集落・方形周溝墓をもたない，本格的な弥生文化の典型的要素の欠落する地域であるが，特に千葉県北部地域ではすでに稲作を開始していた可

能性が高い。両地域は，縄文施文土器群を用いる広域な土器分布圏として一括できる地域圏であり，これまで非稲作地帯のものとされてきた。確かに，栃木県地域の集団は，同時代の西関東とは比べることができないほどに弥生文化的要素に欠け，稲作の有無といった質的な差を強調すれば農耕社会としては未成熟であることは間違いない。

しかし，両地域の間で広域な土器分布圏を形成していたのは，両地域の間に頻繁なヒト・モノの交流があったからであり，その交流のハブとして千葉県北部地域の大規模な集落遺跡が役割をもち，そこでは集住化が顕著となったのであろう。千葉県北部地域は，本格的な弥生文化形成が著しい上総地域や東京湾西岸地域と接続した地域であり，現利根川によって隔絶された栃木県地域とは地勢的に異なっており，本来は全くことなる地域圏としてそれぞれが存在したはずであるが，両者は強い関係のもとにあったわけである。

こうしてみると，縄文施文土器群を用いる広域な土器分布圏では，地域ごとの農耕社会の成熟度は個性的であったが，各地の物資などを交易しあう相互依存の関係を構築しており，単純に弥生文化への変化が遅れた地域ではなく，独自の文化圏を形成していたと考えるべきであろう。

おそらく，こうした横並びに同じではない独自の文化圏（地域圏）が，並列したのが東日本であり，当該地域の弥生文化の地域性の実態であると考える。

一方，本論の後半では，遺跡および竪穴建物数の変動と気候変動について照合を試みた。変動の要因として今回比較検討した環境変動以外で妥当な説明は見あたらないため，後期前半における千葉県北部地域における居住システムの変化は環境変動が主要因と考えざるをえない。すでに多くの研究者によって指摘されているが，後期前半では広域的に集落数や竪穴建物が急減することが認められることから，環境変動は各地で大きな影響を及ぼした可能性がある。ただし，環境変動への対応方法は地域によって異なっていたようである。また，後期前半にそれほどの減少が認められない地域もあり［森岡・三好・田中 2016］，こうした違いについても十分に注意しなくてはならない。地域ごとに詳細な分析を行ないながら環境変動がどの程度各地の人々に影響を与えたのか考えていくことが必要だろう。

ところで，従来の「弥生文化」に代わる新たな枠組みを提示しようという意欲的な取り組みが藤尾や寺前直人によってなされている［藤尾 2017，寺前 2017］。こうした意欲的な取り組みは肯定的に捉えてよいと思われるが，地域の実態を正確に捉えようとする姿勢はその妥当性を担保する上で避けて通ることはできないだろう。実際，東部関東地域は１つの地域圏として捉えられがちであったが，本稿の検討で明らかになったように，居住システムと農業生産に大きな違いが認められた。また，高瀬克範が指摘するとおり，「日本史」という時空間的枠組みを前提とした文化論ではなく，階層的分類に基づく文化論も避けて通ることはできないだろう［高瀬 2016］。こうした様々な取り組みの先にどのような枠組みが我々の前に現れるのか，注目していきたい。

最後に，後期終末の展望についても述べておきたい。本稿では検討することができなかったが，栃木県地域と千葉県北部地域双方の遺跡数と竪穴建物数は後期後半とくらべて急減する。また，両地域の竪穴建物と遺跡数の極端な差は変わらないようであることから，生産様式の違いは当該期も継続していた可能性がある。ところが，土器や墓制は大きく異なる様相を呈する。栃木県地域では引き続き縄文施文土器群が使用されて墓制も変化がないのに対し，千葉県北部地域では「南関東

系」の浸透が進んだことで「東関東系」はきわめて少なくなる。さらに，墓制も厚葬墓となった方形周溝墓が再び造られるようになる。このように，栃木県地域と千葉県北部地域では遺跡数と竪穴建物数の急減という共通の現象が認められるのに対し，物質文化的な違いはさらに顕著になる。これらの要因を詳細かつ慎重に検討を進め，東部関東地域の理解を深めていくことが今後求められる。こうした後期終末の理解の深化が東部関東地域における古墳時代社会形成の理解に対する深化にも直結していくものと思われる。

付記

本稿をなすにあたり，栃木県地域の検討にあたっては，放送大学教養学部に所属し，小林が研究の指導にあたっていた池田和之氏の卒業論文の研究成果［池田 2014］のうち，遺跡の集成表と分布図をその後の新出資料などを加えて大幅に修正し使用し，研究成果についても一部引用した。なお，残念ながら池田氏は 2016 年に逝去された。この事実を本稿執筆時点で知り，池田氏による研究が，栃木において非常に貴重であり，論文の成果を発表することを池田氏が生前に強く希望されていたことから共同執筆者に加えた次第である。謹んで，本稿を故池田和之氏に捧げ感謝申し上げたい。また，石川日出志・植木雅博・小林 嵩・佐藤兼理・菅 榮太郎・溝口孝司・若林邦彦の各氏には本稿を草するにあたってご教示を賜った。末筆ではあるが，厚く御礼申し上げる。

なお，本稿の執筆は，❶小林・轟両名，❷小林，❸轟，❹-(1) 小林・池田，❹-(2) 轟，❹-(3) 小林・轟両名，❺小林・轟両名で基本的に分担したが，それぞれ両名で議論し修正しており，いずれについても両名に文責があることを明記しておく。

註

(1)――非稲作地帯と考えられてきた東部関東地域については，旧利根川から香取の海にかけて容易に越えることができない見えざる壁があり，この東側の地域において本格的な弥生文化の要素が欠落すると考えられてきた［小林 2007 ほか］。しかし，本稿で検討を試みるように，千葉県北部地域の様相からみれば，こうした見えざる壁の周辺に広げて考えなければならず，厳密には「旧利根川と香取の海周辺とその東側の地域」とすべきである。

(2)――近年，他の C_3 植物とくらべて水稲は窒素同位体比が高いことが明らかになってきた［米田・山崎 2017］。これを活かせば，炭化米が陸稲と水稲のどちらに由来するのかを明らかにできると思われる。千葉県北部地域における陸稲・水稲問題を解決する上でこの手法は重要であり，今後分析を進めていく必要がある。

引用参考文献

秋山利光　2003 「田原窪遺跡」(財)千葉県史料研究財団『千葉県の歴史 資料編 考古 2（弥生・古墳時代)』(県史シリーズ 10）千葉県，230-231

安藤広道　2008 「「移住」・「移動」と社会の変化」設楽博己・藤尾慎一郎・松木武彦編『集落からよむ弥生社会』(弥生時代の考古学 8）同成社，58-73

池田和之　2014 『栃木県の弥生時代の考察 ―遺跡データを主体に―』放送大学（人間と文化）2014 年度卒業論文

石川日出志　2011 「関東地域」甲元眞之・寺沢薫編『弥生時代（上)』(講座日本の考古学 5）青木書店，397-429

井上智博　2018 「河内平野における水田稲作の展開と気候変動 ―弥生時代から中世まで―」総合地球環境学研究所編『地域連携セミナー（大阪）要旨集』大学共同利用機関法人人間文化研究機構 総合地球環境学研究所気候変動適応史プロジェクト，6-7

岩上照朗・藤田典夫　1997 「栃木県における弥生時代中期後半の土器群」『研究紀要』第 5 号，栃木県文化振興事業

団，1-18
海老澤稔・黒澤春彦　1999 「原田遺跡群（土浦市）新治台地の大集落」『茨城県における弥生時代研究の到達点』茨城県考古学協会・十王町教育委員会，104-151
遠藤英子　2018 「池子遺跡出土弥生土器の種子圧痕分析」杉山浩平編『弥生時代食の多角的研究　池子遺跡を科学する』六一書房，89-104
大村　直　2015 「土器の移動が証明するもの ―物流ネットワーク論批判―」西相模考古学研究会編『列島東部における弥生後期の変革 ～久ヶ原・弥生町期の現在と未来～』（考古学リーダー 24）　六一書房，395-410
小倉淳一　1996 「東京湾東岸地域の宮ノ台式土器」『史館』第 27 号 史館同人，32-69
小倉淳一　2016 「弥生時代中期環濠の造営時期と地域社会 ―印旛沼周辺地域を対象として―」阿部朝衛先生の還暦を祝う会編『阿部朝衛先生還暦記念論集』阿部朝衛先生の還暦を祝う会，12-27
奥西元一　2008 「戦前まで房総半島北部でおこなわれた湿田農法に関する立地生態的分析」『日本作物学会紀事』第 77 巻 日本作物学会，288-298
熊野正也　1985 「弥生時代後期における小地域土器分布圏の成立 ―房総半島北部の臼井南式土器を中心にして―」論集日本原史刊行会編『論集日本原史』吉川弘文館，411-431
小玉秀成　2004 『霞ヶ浦の弥生土器』玉里村立史料館
小林　嵩　2013a 「下総における弥生時代後期，「印手式」の変遷と土器様相の検討」柳澤清一編『型式論の実践的研究Ⅰ　地域編年研究の広域展開を目指して』（千葉大学大学院人文社会科学研究科研究プロジェクト報告書第 251 集）千葉大学大学院人文社会科学研究科，64-85
小林　嵩　2015 「下総の弥生時代後期土器編年」千葉大学文学部考古学研究室考古学論攷編集委員会編『千葉大学文学部考古学研究室 考古学論攷Ⅱ ―柳澤清一先生退職とともに―』六一書房，211-232
小林　嵩　2016 「下総における弥生時代中期後葉集落の特質」『古代』第 139 号　早稲田大学考古学会，89-111
小林　嵩　2018 「下総における弥生後期集落の特質」『古代』第 142 号 早稲田大学考古学会，105-131
小林青樹　2004 「農耕開始期の居住システムと住居構造 ―中部高地・関東を中心に―」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第 12 集，岩田書店，243-259
小林青樹　2007 「縄文から弥生への転換」『歴博フォーラム　弥生時代はどう変わるか』学生社，136-157
酒井　慈・百原新・工藤雄一郎・服部智至・島立　桂　2015 「市川市国分谷支谷における縄文時代早期末から弥生時代後期にかけての植性変化」『研究連絡誌』№.76（財）千葉県教育振興財団，32-45
設楽博己　2014 「植物・土器・人骨の分析を中心とした日本列島農耕文化複合の形成に関する基礎研究」『SEEDS CONTACT』No.1，設楽科研事務局，9-10
設楽博己編　2019 『農耕文化形成の考古学 上 ―農耕のはじまり―』雄山閣
高瀬克範　2016 「本州島東北部における稲作の開始とその考古学的位置づけ」弥生時代研究会編『弥生時代研究会シンポジウム 仙台平野に弥生文化はなかったのか ―藤尾慎一郎氏の新説講演と意見交換― 予稿集』弥生時代研究会，57-62
高花宏行・渡邉修一　2007 「社会の変容」（財）千葉県史料研究財団『千葉県の歴史 通史篇 原始・古代 1』（県史シリーズ 1）千葉県，457-508
寺前直人　2017 『文明に抗した弥生の人びと』（歴史文化ライブラリー 449）吉川弘文館
轟　直行　2016 「千葉県域における弥生時代の栽培植物利用をめぐる問題と種子圧痕調査について」『SEEDS CONTACT』第 3 号 設楽科研事務局 12-17
轟　直行　2019 「壺形土器の減少と水稲耕作の相関性に関する検討 ―弥生時代中期末から後期の下総台地を対象として―」設楽博己編『農耕文化複合形成の考古学㊦ ―農耕がもたらしたもの―』雄山閣，115-126
轟　直行・佐々木由香・那須浩郎・百原　新　2019 「八千代市所在遺跡における弥生時代から平安時代を対象とした種子圧痕調査の結果」『SEEDS CONTACT』第 6 号 設楽科研事務局，25-28
中塚　武　2018 「日本史の背後にある気候変動の概観」総合地球環境学研究所編『地域連携セミナー（大阪）要旨集』大学共同利用機関法人人間文化研究機構 総合地球環境学研究所気候適応史プロジェクト，2-3
中塚　武編　2020 「第 3 巻 先史・古代の気候と社会変化」『気候変動から読みなおす日本史』第 3 巻，総合地球環境学研究所，臨川書店
藤田典夫　2007 「第 5 章弥生時代」『研究紀要』第 15 号（財）とちぎ生涯学習文化財団埋蔵文化財センター，1-18
森岡秀人・三好 玄・田中元浩　2016 「総括」古代学協会編『集落動態からみた弥生時代から古墳時代への社会変化』六一書房，355-398

八千代市教育委員会教育総務課文化財班編　2017b 『埋(まい)やちよ』№38 八千代市教育委員会
米田　穣　2018 「池子遺跡のヒトと動物の炭素・窒素同位体比から見た弥生時代の食生活」杉山浩平編『弥生時代食の多角的研究 ―池子遺跡を科学する―』六一書房，73-87
米田　穣・山崎孔平　2017 「同位体分析からさぐる弥生時代の食生態」『季刊考古学』第 138 号 雄山閣，43-46
若林邦彦　2018 「弥生時代から古墳時代へのムラの変化と気候変動 ―淀川流域を対象として―」総合地球環境学研究所編『地域連携セミナー（大阪）要旨集』大学共同利用機関法人人間文化研究機構 総合地球環境学研究所気候適応史プロジェクト，4-5
渡邉修一　2007 「農耕社会の成立」(財)千葉県史料研究財団『千葉県の歴史 通史篇 原始･古代 1』(県史シリーズ 1) 千葉県，417-456

竪穴建物数データ関連発掘調査報告書他

（栃木県地域関係）

秋山隆雄　1997 『牧ノ内遺跡Ⅰ』小山市教育委員会，67-134，100-107，133-134
足立佳代　2009 「2 常見遺跡第 3 次発掘調査」『平成 8 年度文化財保護年報』足利市教育委員会，50-59
池田敏宏他　1999 『台畑遺跡・谷向遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，18，25，58-60
石川　均　1981 『下都賀郡国分寺町柴工業団地内遺跡』栃木県教育委員会，63-72
石川　均他　1985a 『戸木内遺跡』粟野町教育委員会，7-37
石川　均他　1985b 『戸木内遺跡Ⅱ』粟野町教育委員会，11-20
石川　均他　1978 『長堤遺跡発掘調査報告書』栃木県教育委員会，11-14
市橋一郎他　1995 「1 利保南遺跡第 1 次発掘調査」『平成 6 年度埋蔵文化財発掘調査年報』足利市教育委員会，5-11
岩上照朗他　1978 『宇都宮市瑞穂野団地遺跡』宇都宮市瑞穂野土地区画整理組合・宇都宮市教育委員会，49-51，121-125
岩上照朗他　1985 『車堂』益子町史編さん委員会，18-45
上野修一他　1998 『山崎北・金沢・台耕上・関口遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，165-193
上野修一他　2001 『八剣遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，16-18
上原康子他　1999 『清六Ⅲ遺跡Ⅰ（縄文・弥生・古墳時代編)』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，61-94，103p
内山敏行　1997 『戸木内遺跡（第 4 次調査)』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，41-59，61，178-179
内山敏行他　1998『新郭古墳群・新郭遺跡・下り遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，77-84
海老原侑雄他　1996 『八幡根東遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，135-140
大金宣亮他　1974 「弥生時代」『井頭』栃木県教育委員会，107-108，167，178-179，237-239
大川清他　1992 『上ノ原・向原南遺跡』日本窯業史研究所，9-17
大川清他　1994 「どっち窪西」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報〔平成 4 年度〕』栃木県教育委員会，61-62
大川清他　1995 『栃木県上三川町 殿山遺跡Ⅰ』日本窯業史研究所，24-39
大澤伸啓　1998 『中日向 13 号墳発掘調査報告書』足利市教育委員会，12-14
片根善幸　1997 『間々田地区遺跡群Ⅰ』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，74-77
亀田幸久他　1997 『金山遺跡Ⅵ』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，112-113
亀田幸久　2001 『大塚古墳群内遺跡・塚原遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団，23-53
北原実徳他　1979 『栃木県喜連川町 三菱自工自動車試験場内遺跡発掘調査報告書』三菱自動車(株)，12-25
君島利行　1995 『明城遺跡』壬生町教育委員会，14-39
後藤信祐他　1990 『溜ノ台遺跡』栃木県教育委員会，25-28
今平利行　2006 『西下谷田遺跡 ―弥生・古墳時代前期編―』宇都宮市教育委員会，36-38
内山敏行　2005 「立野遺跡 第二分冊（1 ～ 4 区・6 ～ 8 区)『東谷・中島地区遺跡群 5』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，68-70，580-581，628-637
齋藤和行　1996 「3 利保南遺跡第 2 次発掘調査」『平成 7 年度文化財保護年報』足利市教育委員会，62-65
斉藤恒夫　2001 『黒袴台遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団，161-162
齋藤弘他　1994 『田間東道北遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，31-34
斎藤光利　1987 『朝日観音遺跡』南河内町教育委員会，9-18
斎藤光利　1992 『三王山南塚 2 号墳発掘調査概報』南河内町教育委員会，8-9

篠原浩恵他　2011 『田島持舟遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，40-42，73-82，86-87
下谷　淳　1998 『山王遺跡』 南河内町教育委員会，16-18，22-24
杉原荘介　1981 『栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群』明治大学文学部研究報告 考古学 第八冊，（株）臨川書店，107p
芹澤清八　2005 『堀越遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団，68-76
竹澤　謙 「第三節　弥生時代」『栃木県史　資料編　考古二』栃木県史編さん委員会，52-61
田代　隆　1993 『谷館野東・谷館野西・上芝遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，36-38，41，47，61，103-109，133-135，158，161-162，243-244
田代　隆　1994 『諏訪山遺跡・諏訪山北遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，60-62
田代　隆他　1995 『下古館遺跡』（遺構遺物編）栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，285-289
田村雅美・芹澤清八・斉藤恒夫　2001 『ヘビ塚遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団 38-42，43-46
津野　仁他　2005 『東谷・中島地区遺跡群 6 磯岡遺跡（2～7 区)』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，26
東京管区気象台　2012 『気候変動レポート 2012』―関東甲信・北陸・東海地方―　東京管区気象台 HP
栃木県史編さん委員会原始部会　1979『阿蘇郡葛生町 上仙波遺跡発掘調査報告』栃木県教育委員会，17p
栃木県史編さん委員会　1976 『栃木県史 資料編 1』栃木県史編さん委員会
冨川　努　2004 『本村遺跡』（弥生・古墳編）宇都宮市教育委員会，22-48，48-49
中山　晋他　1989 『河内郡南河内町　三王山南塚古墳群』栃木県教育委員会，6-9
中山　晋他　1981 『下都賀郡国分寺町　柴工業団地内遺跡調査報告』栃木県教育委員会・栃木県土地開発公社，63-72
中山　晋　2005 『彦七新田遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団，321，434
永岡弘章　2005 『津村遺跡』鹿沼市教育委員会，34-35，55-56
中村紀男　1971 「第 3 節 仏沼遺跡」『倉田芳郎編　栃木日産遺跡』駒沢大学考古学研究所，97-99
中村紀男　2002 『登谷遺跡』茂木町教育委員会，183-184
野口静夫　1996 『西山遺跡発掘調査報告書』栃木県芳賀町教育委員会，93-117
橋本澄朗　1980 「新福寺遺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』栃木県教育委員会，20-25
橋本澄朗　1984 「ニ 稲荷山遺跡」『真岡市史』第一巻　考古資料編，216-222
橋本澄朗　2001 『黒袴台遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団，163-164
橋本澄郎　2001 『権現山遺跡・百目鬼遺跡』栃木県教育委員会・(財)とちぎ生涯学習文化財団，170，172p
初山孝行　1999 『東谷・中島地区遺跡群 No. 1 磯岡遺跡（Ⅰ区)』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，48-50
塙　静夫・田代　寛　1972 「真岡市柳久保遺跡調査概報」『栃木県史研究』第 3 号県史編さん室，56-73
塙　静夫他　1974 『上山遺跡』栃木県教育委員会・東京道路公団東京支社，9-14
塙　静夫他　1992 『栃木県芳賀町　免の内台遺跡』41-43，341-342
日下田欣一他　1990 『三ノ谷東・谷館野北遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，159-164
藤田典夫他　1986 『烏森遺跡』住宅・都市整備公団・(財)栃木県文化振興事業団，33-46，125-126
藤田典夫他　1987 『稲荷塚・大野原』栃木県教育委員会，300-302
藤田典夫他　2000 『杉村・磯岡・磯岡北』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，325-329
法師人敏昭　1992 「(16) 寺久保遺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報〔平成 2 年度〕栃木県教育委員会，55p
細谷正策他　1987 『御新田遺跡』『富士前遺跡』『ヤッチャラ遺跡』『下り遺跡』栃木県教育委員会，60-72，115，121-124，140-141
前澤俊雄他　1981 『菅田西根遺跡』足利市教育委員会，25-29
前沢信博　1992 「箕輪遺跡土坑出土の弥生時代遺物について」『茂木町史資料 第四集』茂木町史編さん委員会，39-52
前沢信博他 「四 長谷津遺跡」『市貝町史 第一巻 自然・原始古代・中世資料編』市貝町，232-241
三沢正善　1978 『乙女不動原北浦遺跡』小山市教育委員会，266-269
三沢正善　1979 『乙女不動原亀田遺跡（B 地点)』小山市教育委員会，14-17，19-22
南河内町史編さん委員会　1998 『南河内町史　通史編　自然・考古（第九巻)』南河内町史編さん委員会
森田久男他　1986 「町屋遺跡」『栃木県埋蔵文化財保護行政年報』栃木県教育委員会，163-164
山口耕一　1999 『多功南原遺跡』栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団，247-290
山口仁他　1990 『小倉水神社裏遺跡・水木東遺跡』栃木県教育委員会・(財)栃木県文化振興事業団，173-188
山口仁他　1991 『鹿沼流通業務団地内遺跡』栃木県教育委員会，143-147，388-391，452-455，481，505-505

山武考古学研究所　1992 『免の内台遺跡調査概報Ⅰ』芳賀町教育委員会，41-43，341-342
横川　宏　1978 『長堤遺跡発掘調査報告書』栃木県教育委員会，15
吉田　哲他　2000 『伊勢崎Ⅱ遺跡』栃木県教育委員会・(財) 栃木県文化振興事業団，210-215

（千葉県北部地域関係）

青山　博編　1987 『小林遺跡発掘調査報告書』印西市教育委員会
秋元健一・荒井世志紀・青山　博・宮内勝己・渋谷　貢・渋谷興平　1986 『坂戸遺跡』坂戸遺跡埋蔵文化財発掘調査団・坂戸遺跡調査会
秋山利光編　1999 『千葉県八千代市 川崎山遺跡 埋蔵文化発掘調査報告書』川崎製鐵(株)
秋山利光編　2008 『千葉県八千代市 上ノ山遺跡 埋蔵文化財発掘調査報告書』三奈建興(株)
朝比奈竹男編　2001 『千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 第 2 分冊』大成建設(株)
朝比奈竹男編　2004 『千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 第 3 分冊』大成建設(株)
朝比奈竹男編　2004 『千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 第 4 分冊』大成建設(株)
朝比奈竹男編　2005 『千葉県八千代市上谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 第 5 分冊』大成建設(株)
朝比奈竹男・藤原　均　1984 『千葉県八千代市 阿蘇中学校東側遺跡Ⅲ』八千代市教育委員会
朝比奈竹男・森竜哉編 2007『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成 18 年度』八千代市教育委員会
阿部寿彦編　1993 『千葉県佐倉市 高岡遺跡群Ⅰ・Ⅱ』(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 71 集） 生活協同組合千葉県勤労者住宅協会・清水建設(株)
天野　努・千葉健造・谷　旬・田坂浩編　1974 『八千代市村上遺跡群』日本住宅公団東京支所・(財)千葉県都市公社
新井和之編　1985『成田市　松崎白子，大袋台畑・塔之下遺跡発掘調査報告書』成田市松崎・大袋遺跡調査会
新井和之・道沢　明・木内達彦　1982 『北総線 ―東京電力北総線設置工事に伴なう埋蔵文化財調査報告書』東京電力北総線遺跡調査会
飯島伸一編　2002 『郷野遺跡　四街道市成台土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査（1)』(財)印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 185 集）大日本土木(株)
池田大助編　1981 『パイプライン ―新東京国際空港航空燃料パイプライン事業用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―』(財)千葉県文化財センター
池田大助編　2016 『四街道市嶋越遺跡（2）旧石器時代～弥生時代編　物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸ』(千葉県教育振興財団調査報告第 749 集）（独）都市再生機構首都圏ニュータウン本部・(財)千葉県教育振興財団
池田大助編　2016 『四街道市棒山・呼戸遺跡　物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書ＸＸⅣ』(千葉県教育振興財団調査報告 第 762 集）（独）都市再生機構首都圏ニュータウン本部・(財)千葉県教育振興財団
石倉亮治編　2004 『佐倉印西線（緊急地方道路整備）埋蔵文化財調査報告書 佐倉市岩名町前遺跡』(千葉県文化財センター調査報告 第 490 集） 千葉県土木部・(財)千葉県文化財センター
石橋宏克編　1989 『成田市 林北遺跡・長山遺跡 ―一般県道成田下総線建設に伴う埋蔵文化財調査報告書Ⅱ―』(千葉県文化財センター調査報告第 163 集） 千葉県土木部
石渡典子編　2009 『鎌刈遺跡』財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 272 集） 東京電力(株)千葉工事センター
伊藤弘一・宮澤久史　2006 『千葉県八千代市 川崎山遺跡ｋ地点』協和不動産(株)
糸川道行編　2004 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ＸⅥ　印西市船尾白幡遺跡』(千葉県文化財センター調査報告 第 477 集）都市基盤整備公団千葉地域支社千葉ニュータウン事業本部・(財)千葉県文化財センター
糸川道行編　2005 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書ＸⅦ 印西市船尾白幡遺跡Ⅱ』(千葉県文化財センター調査報告 第 510 集）（独）都市再生機構千葉地域支社千葉ニュータウン事業本部・(財)千葉県文化財センター
糸川道行編　2006 『物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ 四街道市小屋ノ内遺跡（2)』(千葉県教育振興財団調査報告 第 557 集）（独）都市再生機構・(財)千葉県教育振興財団
糸川道行編　2011 『印西市曽谷窪遺跡 総合交付金（住基）委託（埋蔵文化財調査）報告書』(千葉県教育振興財団調査報告 第 661 集） 千葉県県土整備部・(財)千葉県教育振興財団
猪俣佳二編　1994 『千葉県印旛郡印旛村 吉高浅間古墳発掘調査報告書 ―印旛村吉高地区土取工事に伴う埋蔵文化

財調査―』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第82集）（財）印旛郡市文化財センター
猪股佳二編　2006 『平成16年度佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書』佐倉市教育委員会
伊礼正雄・熊野正也編　1975 『臼井南』佐倉市教育委員会・佐倉市遺跡調査会
宇井義典編　2005 『太田長作遺跡（第2次）』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第222集） 社会福祉法人愛光
林田利之編　1998 『太田長作遺跡 特別養護老人ホーム建設に伴う埋蔵文化財調査』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第144集）社会福祉法人愛光
宇田敦司編　1997 『南羽鳥遺跡群 成田カントリークラブゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅱ）』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第133集） 成田スポーツ開発(株)
内田儀久・田村言行・横田里司・高橋健一・高山　優　1979 『江原台 ―土地区画整理事業に伴う千葉県佐倉市江原台第1遺跡Ⅱ区の発掘調査報告書―』佐倉市教育委員会
内田理彦編　1994 『千葉県印旛郡本埜村 宮内遺跡発掘調査報告書 ―本埜村総合運動場建設に伴う埋蔵文化財調査―』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第97集）本埜村
海野道義・内田儀久・田村言行・高橋健一 1978『佐倉市文化財調査報告 江原台第1遺跡発掘調査報告3』佐倉市教育委員会
江森幹浩・喜多啓介編　1996 『曲輪ノ内遺跡（第二次）発掘調査報告書 ユニディガーデンセンター佐倉店建設予定地内埋蔵文化財調査』(財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第109集)(財)印旛郡市文化財センター
大内千年編　2006 『松崎地区内陸工業用地造成整備事業埋蔵文化財調査報告書5 ―印西市松崎Ⅳ遺跡・松崎Ⅴ遺跡―』（千葉県教育振興財団調査報告 第548集） 千葉県企業庁・(財)千葉県教育振興財団
大澤　孝編　1989 『千葉県佐倉市 六崎貴舟台遺跡発掘調査報告書』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第28集） (株)建興社
大澤　孝編　2004 『千葉県印西市天神台遺跡（第11地点）発掘調査報告書 不特定遺跡発掘調査助成事業』印西市教育委員会
大野徳強編　1988 『千葉県印旛郡印旛村平賀地先土採取場埋蔵文化財調査 平賀山ノ下10号墳発掘調査報告書』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第25集） （有）志村興業
大野康男編　1991 『八千代市白幡前遺跡 ―萱田地区埋蔵文化財調査報告書Ⅴ―』（千葉県文化財センター調査報告 第188集）住宅・都市整備公団首都圏都市開発本部
おおびた遺跡調査団編　1975 『おおびた遺跡 ―八千代市少年自然の家建設地内遺跡―』八千代市教育委員会
小笠原永隆編　2004 『印西市馬込遺跡（仮称）平岡自然公園埋蔵文化財調査報告書』（千葉県文化財センター調査報告 第495集） 印西地区環境整備事業組合・(財)千葉県文化財センター
小倉和重編　1997 『城次郎丸遺跡（第3次調査）佐倉市城次郎丸地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第134集） (財)印旛郡市文化財センター
小倉和重編　2001 『平成11年度・平成12年度 印西市内遺跡発掘調査報告書 天神台遺跡第8地点』印西市教育委員会
柿沼修平・中野修秀　1985 『棒作遺跡発掘調査報告』佐倉市棒作遺跡調査会
加藤貴之編　2005 『江原埜谷遺跡（第4次）江原埜谷宅地造成地内埋蔵文化財調査』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第224集） 日東建設(株)
香取正彦編　2006 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XⅧ 本埜村角田台遺跡（弥生時代以降）』（千葉県教育振興財団調査報告第530集）（独）都市再生機構千葉地域支社千葉ニュータウン事業本部・(財)千葉県教育振興財団
香取正彦編　2009 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XXI 印旛村向辺田遺跡』（千葉県教育振興財団調査報告 第621集）（独）都市再生機構千葉地域支社千葉ニュータウン事業本部・(財)千葉県教育振興財団
香取正彦・井上哲朗編　2008 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 印西市南西ヶ作遺跡・本埜村弐ト込遺跡』（千葉県教育振興財団調査報告 第591集）（独）都市再生機構千葉地域支社千葉ニュータウン事業本部・(財)千葉県教育振興財団
金丸　誠編　2002 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書XV 印西市向新田遺跡』（千葉県文化財センター調査報告 第423集） 都市基盤整備公団千葉地域支社千葉ニュータウン事業本部・(財)千葉県文化財センター
川島裕毅編　2009 『千葉県四街道市 鶴口遺跡発掘調査報告書（仮称）亀崎介護老人福祉施設建設に伴う埋蔵文化財調査』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第277集）社会福祉法人萩会

川端弘士・高橋誠・宮　文子・林田利之・恩田　勇　1987 『椎ノ木遺跡 成田市産業廃棄物処理場予定地内埋蔵文化財調査報告書』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 15 集）（株）山一商事・（財）印旛郡市文化財センター
木内達彦・大澤　孝・飯島伸一　1986 『印旛村村道瀬戸師戸線発掘調査報告書』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 2 集）印旛村
岸本雅人編　2006 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書 5 八千代市島田込ノ内遺跡（2）・間見穴遺跡（3）・道地遺跡（2）』（千葉県教育振興財団調査報告 第 559 集）（独）都市再生機構千葉地域支社・（財）千葉県教育振興財団
喜多圭介編　1989 『長田和田遺跡 ニュー東京空港ゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書（Ⅰ）』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 30 集）（財）印旛郡市文化財センター
喜多圭介編　1993 『千葉県佐倉市 石川阿ら地遺跡 佐倉市石川地区宅地造成予定地内埋蔵文化財調査報告書』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 66 集）（財）印旛郡市文化財センター
喜多圭介編　1999 『ちぼろく遺跡 印旛村道鎌刈・師戸線道路建設事業に伴う埋蔵文化財調査』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 150 集）（財）印旛郡市文化財センター
喜多圭介編　2001 『佐倉城跡 佐倉中学校体育館工事に伴う埋蔵文化財調査』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 174 集）（財）印旛郡市文化財センター
喜多裕明編　1992 『千葉県印旛郡印旛村 トヶ前遺跡 ―印旛村泉カントリー倶楽部コース造成事業地内埋蔵文化財調査（1）―』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 72 集）住友不動産販売（株）
木原高弘・田村　隆・香取正彦　2016 『四街道市館ノ山遺跡（3）物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書XXⅡ』（千葉県教育振興財団調査報告第 759 集）（独）都市再生機構首都圏ニュータウン本部・（財）千葉県教育振興財団
熊野正也編　1976 『臼井南 ―石神第Ⅲ地点発掘調査報告書―』臼井駅南土地区画整理組合
黒沢　崇　2010 『成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財発掘調査報告書 4　印旛村立田台第 2 遺跡・木橋第 2 遺跡』（千葉県教育振興財団調査報告第 643 集）成田高速鉄道アクセス（株）・（財）千葉県教育振興財団
黒沢　崇編　2016 『八千代市堂の上遺跡・上高野白幡遺跡・平沢遺跡・赤作遺跡・阿蘇中学校東側遺跡 一般国道 296 号道路改良事業埋蔵文化財発掘調査報告書』（千葉県教育委員会埋蔵文化財調査報告 第 15 集）千葉県教育委員会
桑原　護編　1974 『飯重』佐倉市教育委員会・佐倉市遺跡調査会
小谷龍司編　1996 『千葉県佐倉市 八木宇廣遺跡発掘調査報告書』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 111 集）財団法人印旛郡市文化財センター
小牧美知枝編　2002 『千葉県佐倉市臼井台大名宿遺跡（第 4 次）』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 190 集）（財）印旛郡市文化財センター
小牧美知枝編　2010 『城次郎丸遺跡（第 7・8・12・13・14 次）』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 286 集）佐倉市
小牧美知枝編　2016 『千葉県佐倉市海隣寺於茶屋遺跡（第 2 次）発掘調査報告書』佐倉市教育委員会文化課
小牧美知枝・中山俊之編　2016 『山崎遺跡 印西市瀬戸メガソーラー建設に伴う埋蔵文化財調査』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第 330 集）コスモリフォーム（株）
齋藤　毅編　2007 『上福田小橋遺跡 成田市道大竹豊住線道路改良工事に伴う埋蔵文化財調査』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 257 集）成田市
齋藤　毅編　2014 『馬場№-1 遺跡（第 3 次）物井新田土地区画整理事業に伴う物井 47 号線埋蔵文化財調査』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 335 集）四街道市
酒井弘志編　2000 『南羽鳥遺跡群Ⅳ 成田カントリークラブゴルフ場造成地内埋蔵文化財調査報告書』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 156 集）成田スポーツ開発（株）
酒井弘志編　2000 『向新田遺跡 印西市道 00-114 号線埋蔵文化財調査委託』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 166 集）印西市
阪田正一編　1984 『八千代市権現後遺跡』（財）千葉県文化財センター
阪田正一編　1985 『八千代市北海道遺跡』（財）千葉県文化財センター
阪田正一編　1986 『八千代市ヲサル山遺跡』住宅・都市整備公団首圏都市開発本部・（財）千葉県文化財センター
佐倉市大崎台 B 地区遺跡調査会編　1985 『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅰ』佐倉市大崎台 B 地区遺跡調査会
佐倉市大崎台 B 地区遺跡調査会編　1986 『大崎台遺跡発掘調査報告Ⅱ』佐倉市大崎台 B 地区遺跡調査会
佐藤克己編　1980 『阿蘇中学校東側遺跡』八千代市教育委員会

渋谷健司編　1999 『天王前遺跡（第２次） 本埜村道下島合・天王前線改良工事に伴う埋蔵文化財調査』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第149集） 本埜村
渋谷健司　2000 『千葉県佐倉市八木山ノ田遺跡 ―不特定遺跡発掘調査助成事業―』佐倉市教育委員会
渋谷健司編　2009 『四街道市御山遺跡（第２地点）物井介護福祉施設建設に伴う埋蔵文化財調査委託』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第279集）（財）印旛郡市文化財センター
渋谷健司編　2010 『印西市駒形北遺跡（第３地点）』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第281集）印西市
渋谷興平・渋谷　貢・青山　博　1987 『寺崎遺跡群発掘調査報告書』佐倉市教育委員会・寺崎遺跡群調査会
渋谷芳則・千田幸生・大賀　健ほか　1986 『四街道市吉岡遺跡群』四街道市吉岡遺跡群調査会
嶋田浩司・大岩桂子編　2013 『四街道市北ノ作遺跡 物井地区埋蔵文化財発掘調査報告書13』（千葉県教育振興財団調査報告 第711集）（独）都市再生機構首都圏ニュータウン本部・（財）千葉県教育振興財団
進藤泰浩編　1994 『印旛村道山田平賀線予定地内埋蔵文化財調査報告書』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第81集） 印旛村
末武直則　1988 『押畑子の神城跡発掘調査報告書』（財団法人 印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第24集）千葉県成田土木事務所
末武直則　1991 『千葉県印旛郡本埜村 龍腹寺１号塚・天王前遺跡発掘調査報告書 ―本埜村道笹山三度山線埋蔵文化財調査報告書―』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第47集） 本埜村
鈴木圭一編　1995 『小菅法華塚Ⅰ・Ⅱ遺跡 成田ビューカントリークラブ造成地内埋蔵文化財調査報告書』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第92集） 日本ビューホテル（株）
鈴木圭一・高花宏行　1997 『小菅三ツ塚遺跡 成田ビューカントリー倶楽部造成地内埋蔵文化財調査報告書（2）』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第124集） 日本ビューホテル（株）
鈴木圭一・布施　仁・天本昌希・加藤貴之・西本豊弘・小林園子　2005 『江原台遺跡 国立佐倉病院統廃合後における後医療機関増築工事のための埋蔵文化財調査』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第221集）社会福祉法人聖隷福祉事業団
鈴木弘幸・安藤杜夫・平岡和夫　1981 『吉高大谷遺跡』吉高大谷遺跡調査会
清藤一順・及川淳一編　1984 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告Ⅷ』千葉県企業庁・（財）千葉県文化財センター
高田　博編　1977 『佐倉市江原台遺跡発掘調査報告書Ⅰ ―第１次・第２次調査―』千葉県教育委員会
箕輪正信・高橋健一 1977『佐倉市文化財調査報告　江原台第１遺跡発掘調査報告２』佐倉市教育委員会
高野浩之・大橋生編　2018 『麦丸宮前上遺跡ｅ地点発掘調査報告書 宅地造成に伴う埋蔵文化財調査』日新住宅販売（株）・八千代市教育委員会・（株）地域文化財研究所
高橋博文編　1991 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅹ』（千葉県文化財センター調査報告第190集）千葉県企業庁・住宅・都市整備公団千葉開発局
高橋博文編　2010 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書22　泉北側第１遺跡・大森割野遺跡・割野所在馬土手・武西近隣遺跡』（千葉県教育振興財団調査報告 第634集）（独）都市再生機構千葉地域支社千葉ニュータウン事業本部・（財）千葉県教育振興財団
高橋博文・古内茂　2011 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書24　印西市天王台西遺跡』（千葉県教育振興財団調査報告 第669集）（独）都市再生機構首都圏ニュータウン本部・（財）千葉県教育振興財団
高橋　誠編　2001 『六崎貴舟台遺跡（第８次）』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第175集）（財）印旛郡市文化財センター
高橋　誠編　2001 『六崎外出遺跡（第４次）』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第180集）（株）オオツカ
高橋　誠編　2004 『権現堂遺跡 四街道市成台中土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査（Ⅱ）』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第203集）四街道市成台中土地区画整理組合
高橋　誠・青柳好宏編　2000 『萩原長原遺跡・狢谷塚群』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書第162集） 印旛村・（財）印旛郡市文化財センター
高花宏行編　1995 『井ノ崎台遺跡Ⅱ 井ノ崎台地区土取工事に伴う埋蔵文化財調査報告書』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第103集）（有）米野建材
田川　良編　1977 『生谷 ―千葉県佐倉市埋蔵文化財発掘調査報告書―』生谷遺跡発掘調査団
田川　良編　2011 『吉見台遺跡群発掘調査報告書Ⅰ 生谷間野遺跡・吉見台遺跡（住居址編）』吉見台遺跡群調査会

竹内順一・小牧美知枝編　2008 『宮内井戸作遺跡（弥生時代以降編）千葉リサーチパーク開発事業予定地内埋蔵文化財調査（8）』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 266 集）三菱地所（株）
田中　裕編　2004 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書 2　八千代市道地遺跡』（千葉県文化財センター調査報告 第 464 集） 都市基盤整備公団・（財）千葉県文化財センター
田中　裕編　2004 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書 3 間見穴遺跡』（千葉県文化財センター調査報告 第 473 集） 都市基盤整備公団千葉地域支社千葉ニュータウン事業本部・（財）千葉県文化財センター
田中　裕編　2005 『船橋印西線埋蔵文化財調査報告書 4 間見穴遺跡(2)』(千葉県文化財センター調査報告 第506集) (独)都市再生機構千葉地域支社首都圏ニュータウン事業本部・（財）千葉県文化財センター
谷　旬　1983 『成田新線建設事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅱ』日本鉄道建設公団･(財）千葉県文化財センター
常松成人編　2001 『千葉県八千代市平戸台 2 号墳発掘調査報告書』八千代市教育委員会
常松成人編　2003 『千葉県八千代市川崎山遺跡 d 地点 萱田町川崎山土地区画整理事業に先行する埋蔵文化財発掘調査報告書』八千代市萱田町川崎山土地区画整理事業共同施行者
常松成人編　2003 『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書 平成 14 年度 浅間内遺跡第 5 次本調査 浅間内遺跡第 7 次確認調査』八千代市教育委員会
常松成人編　2007 『千葉県八千代市浅間内遺跡発掘調査報告書 平成 18 年度 浅間内遺跡第 2 次本調査 浅間内遺跡第 3 次本調査』八千代市教育委員会
常松成人編　2007 『千葉県八千代市浅間内遺跡・白筋遺跡・沖塚遺跡　八千代市辺田前土地区画整理事業地内埋蔵文化財発掘調査報告書』八千代市辺田前土地区画整理組合
常松成人編　2009 『千葉県八千代市 道地遺跡 e 地点･平戸台 8 号墳 資材置場建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』YAMA テック（株）
寺里和久編 『先崎西原遺跡 信澄寺霊園増設に伴う埋蔵文化財調査』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 173 集）信澄寺
轟　直行編　2016 『千葉県八千代市 逆水遺跡 i 地点 福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』社会福祉法人八千代翼友福祉会
轟　直行編　2019 『千葉県八千代市 大山遺跡 d 地点 宅地造成に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』神正（株）
轟　直行・林和也編　2017 『千葉県八千代市 平沢遺跡 e 地点 福祉施設建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書』社会福祉法人鳳雄会
仲田鋼太編　2002 『向新田遺跡第 2 地点 向新田遺跡第 2 地点発掘調査報告書』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 193 集）財団法人印旛郡市文化財センター
仲田鋼太・小牧美知枝編　2001 『駒形北遺跡（第 2 地点）印西小林無線基地局建設予定地内埋蔵文化財調査』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 176 集）（株）ツーカーセルラー東京
永塚俊司編　2004 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XIX 東峰御幸畑東遺跡（空港№ 62 遺跡）』（千葉県文化財センター調査報告第 483 集）新東京国際空港公団・（財）千葉県文化財センター
中野修秀編　2009 『千葉県八千代市 南谷遺跡発掘調査報告書 霊園進入路の建設に伴う埋蔵文化財調査』宗教法人信澄寺
仲村元宏編　2009 『東町松原古墳 成田市東町配水場高架水塔改築工事に伴う埋蔵文化財調査委託』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 276 集）成田市
仲村元宏編　2011 『台方宮代遺跡（3）ニュータウンスポーツ広場整備事業に伴う埋蔵文化財調査委託』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 296 集）成田市
仲村元宏編　2016 『上福田古墳群･大竹遺跡群Ⅲ（その 1）～（その 6）急傾斜地崩壊対策委託（大竹埋蔵文化財調査）』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 347 集）千葉県成田土木事務所
中山俊之編　1991 『千葉県佐倉市 臼井田小笹台遺跡 ―ファーストリアルエステート用地内埋蔵文化財調査―』（財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 44 集）ファーストリアルエステート（株）
鳴田浩司編　1999 『千葉北部地区新市街地造成整備事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 印西市鳴神山遺跡・白井谷奥遺跡』（千葉県文化財センター調査報告 第 358 集）千葉県企業庁・（財）千葉県文化財センター
鳴田浩司編　2007 『主要地方道成田安食線地方道道路改良事業埋蔵文化財調査報告書 成田市押畑広台遺跡』（千葉県教育振興財団調査報告 第 569 集）千葉県土木部・（財）千葉県教育振興財団
西川博孝・山岡磨由子・小高春雄・平井真紀子　2014 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書 30 印西市大割水溜遺跡・高堀所在野馬土手・向新田遺跡（2）・船尾白幡遺跡Ⅱ―(2)・白井市白井新田 1 号遺跡・印西市鹿黒橋

遺跡・白井市清戸Ⅱ遺跡』(千葉県教育振興財団調査報告第 733 集)(独)都市再生機構首都圏ニュータウン本部・(財)千葉県教育振興財団
西山太郎編　1987 『千葉県印旛郡印西町　天神台遺跡発掘調査報告書』(財団法人 印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 13 集)印西町
沼沢　豊・深沢克友・森　尚登　1978 『佐倉市飯合作遺跡』(財)佐倉市振興協会・(財)千葉県文化財センター
根本岳史編　2008 『生谷新畑遺跡(第 2 次・第 3 次)　市道Ⅰ―32 号線(生谷工区)埋蔵文化財調査業務委託』(財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 268 集)　佐倉市
根本岳史編　2010 『船形手黒遺跡』(財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 282 集)成田市
根本岳史編　2011 『船形手黒 1 号墳』(財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 297 集)成田市
野村優子編　2000 『天神台遺跡 印西市道 08-166 号線埋蔵文化財調査報告書』(財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 160 集)印西市
野村優子編　2000 『萩原株木遺跡 印旛村道ニュータウン・萩原線埋蔵文化財調査報告書』(財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 161 集)印旛村
野村幸希編　1976 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告書Ⅴ』千葉県企業庁・(財)千葉県文化財センター
林　勝則編　1986 『平戸道地遺跡』八千代市教育委員会
林田利之編　1994 『城番塚遺跡 ―佐倉市城地区独身寮建設に伴う埋蔵文化財調査―』佐倉市教育委員会
林田利之編　1996 『臼井屋敷跡遺跡 市道Ⅰ―32 号線(吉見工区)埋蔵文化財調査委託』(財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 107 集)
林田利之編　1997 『吉見台遺跡 B 地点 市道Ⅰ―32 号線(吉見工区)埋蔵文化財調査委託』(財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 128 集)　佐倉市
平井真紀子編　2012 『首都圏中央連絡自動車道埋蔵文化財調査報告書 成田市南城砦跡, 大室石神遺跡, 芝向芝遺跡, 芝西霜田遺跡, 芝東霜田遺跡』(千葉県教育振興財団調査報告 第 683 集)　国土交通省関東地方整備局常総国道事務所・(財)千葉県教育振興財団
平岡和夫編　1979 『萱田町川崎山遺跡 八千代市都市計画街路 3, 4, 1 号線建設工事に伴う発掘調査報告書』八千代市遺跡調査会
広瀬千絵編　2012 『曲輪ノ内遺跡(第 8 次)　店舗建設に伴う埋蔵文化財調査(臼井無線送信所跡地一部)』(財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 310 集)東日本電信(株)
藤岡孝司編　1987 『八千代市井戸向遺跡』(財)千葉県文化財センター
松田冨美子編　2005 『成田市台方下平Ⅰ遺跡・台方下平Ⅱ遺跡発掘調査概報 成田市公津西土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財調査』(財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 227 集)成田市公津西土地区画整理組合
松田富美子編　2007 『成田市台方下平Ⅰ遺跡発掘調査報告書 成田市公津西土地区画整理事業地内埋蔵文化財調査』(財団法人印旛郡市文化財センター発掘調査報告書 第 248 集)成田市公津西土地区画整理組合
間野台・古屋敷遺跡発掘調査団編　1977 『間野台・古屋敷遺跡発掘調査報告書』佐倉市教育委員会
三浦和信編　1976 『吉高家老地遺跡 ―弥生・土師集落址の調査―』吉高家老地遺跡調査会
道澤　明編　1984 『鏑木諏訪尾余遺跡』鏑木諏訪尾余遺跡調査会
宮　重行編　2009 『成田新高速鉄道・北千葉道路埋蔵文化財発掘調査報告書 2 印旛郡印旛村小原第 1 遺跡・小原第 2 遺跡・堀尻第 2 遺跡』(千葉県教育振興財団調査報告 第 620 集)成田高速鉄道アクセス(株)・(財)千葉県教育振興財団
宮　重行・永塚俊司編　2000 『新東京国際空港埋蔵文化財発掘調査報告書XⅢ 東峰御幸畑西遺跡(空港№ 61 遺跡)』(千葉県文化財センター調査報告 第 385 集)新東京国際空港公団・(財)千葉県文化財センター
宮澤久史編　2003 『千葉県八千代市栗谷遺跡(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 第 2 分冊』大成建設(株)
宮澤久史編　2004 『千葉県八千代市栗谷遺跡(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 第 3 分冊』大成建設(株)
宮澤久史編　2004 『千葉県八千代市向境遺跡(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅲ』大成建設(株)
宮澤久史　2005 『千葉県八千代市境堀遺跡(仮称)八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』大成建設(株)
宮澤久史編　2008 『千葉県八千代市 川崎山遺跡 m 地点発掘調査報告書』八千代市教育委員会

武藤健一編　2000 『千葉県八千代市上ノ山遺跡 b・c 地点発掘調査報告書』中台道子・中台昭
武藤健一編　2001 『千葉県八千代市上谷遺跡(仮称) 八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅱ 第 1 分冊』大成建設(株)
武藤健一編　2004 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成 15 年度』八千代市教育委員会
武藤健一・宮澤久史・森　竜哉・朝比奈竹男　2003 『千葉県八千代市市内遺跡発掘調査報告書 平成 14 年度』八千代市教育委員会
村山好文編　1986 『平賀 平賀遺跡群発掘調査報告書』平賀遺跡群発掘調査会
森　竜哉編　2004 『千葉県八千代市 川崎山遺跡 h 地点 店舗建設事業埋蔵文化財発掘調査報告書』寺沢鴻
森　竜哉編　2008 『千葉県八千代市　川崎山遺跡 n 地点発掘調査報告書』二十一大成住販(株)
森　竜哉編　2011 『千葉県八千代市 平沢遺跡 b 地点』社会福祉法人鳳雄会・(株)アップルズ総合計画
森　竜哉編　2013 『千葉県八千代市 平沢遺跡 a 地点・殿台遺跡 a 地点 都市計画道路 3・4・9 号線地内埋蔵文化財発掘調査報告書』八千代市教育委員会
森本和男編　2009 『印旛村六反目遺跡・広台遺跡・際作遺跡　住宅市街地基盤整備（県道 263 号八千代宗像線埋蔵文化財調査)』(財団法人千葉県教育振興財団 第 617 集)　千葉県印旛地域整備センター・(財)千葉県教育振興財団
八千代市教育委員会編　1995 『平成 6 年度 八千代市埋蔵文化財調査年報』八千代市教育委員会
八千代市教育委員会教育総務課文化財班編　2017a 『埋(まい)やちよ』№37 八千代市教育委員会
米田幸雄編　1991 『千葉県印旛郡印西町 天神台・ヤジダ遺跡発掘調査報告書 木下線延長（1 期）工事に伴う埋蔵文化財調査』東京電力(株)
蕨　茂美編　2001 『千葉県八千代市栗谷遺跡（仮称）八千代カルチャータウン開発事業関連埋蔵文化財調査報告書Ⅰ 第 1 分冊』大成建設(株)

図表の出典： 図 1：小林作成が（池田 2016）の原図を大幅に修正し作成，図 2：小林・轟作成，図 3：千葉県総務部文書館提供の画像をもとに轟が作成，図 4：渡邉 2007，八千代市教育委員会編 1995，図 5：佐倉市大崎台 B 地区遺跡調査会編 1985・1986，谷 1983，酒井編 2000，田川編 2011，阿部編 1993，小谷編 1996，宮澤編 2003，阪田編 1984，轟・林編 2017，高橋・青柳編 2000，図 6：酒井編 2000，宮澤 2005，図 7：高花・渡邉 2007，図 8：高橋・青柳編 2000，糸川編 2004，阪田編 1984，宮澤編 2003，図 9：轟作成，表 1 は（池田 2016）の原表を大幅に修正し小林が作成，表 2 ～ 4：轟作成，その他，各文献より引用改変

小林青樹　（奈良大学文学部文化財学科，国立歴史民俗博物館共同研究員）
轟　直行　（川崎市教育委員会，国立歴史民俗博物館共同研究研究協力者）
池田和之　（元放送大学教養学部）

（2020 年 12 月 11 日受付，2021 年 7 月 27 日審査終了）

Middle to Late Yayoi Period Society in Eastern Kanto Area

KOBAYASHI Seiji, TODOROKI Naoyuki and IKEDA Kazuyuki

This paper considers social changes by examining changes in the number of pit-buildings in the eastern Kanto region (Tochigi prefecture region and northern Chiba prefecture region) from the latter half of the middle to the latter half of the late Yayoi period. In both the Tochigi prefecture area and the northern part of Chiba prefecture, the number of pit buildings which increased in the latter half of the middle Yayoi period decreased rapidly in the former half and then increased sharply again in the latter half of the late Yayoi period. In the Tochigi prefecture area, only a dozen or so pit-buildings were found from the entire period, and the small-scale distributed type, which was the residential system of the reburial graves building group in the previous stage, was continued. It was considered that the society had a small population by growing millet and barnyard millet on the plateau with additional rice cultivation on a small scale. On the other hand, unlike the Tochigi prefecture area, in the northern area of Chiba prefecture the residential system changed significantly depending on the period. In the latter half of the middle Yayoi period, a residential system emerged, where people lived in large moated settlements centred on the Mutsuzaki-Osakidai site. But in the former half of the late Yayoi period, it changed to a highly homogeneous residential system with little difference between small villages containing less than 10 pit-buildings. Then, in the latter half of the late Yayoi period, people and goods gathered to form multiple hub settlements on a large scale and created a difference from small settlements.

Key words: Eastern Kanto, Number of pit-buildings, Small-scale distributed type of residential system, Former half of the late Yayoi period, Latter half of the late Yayoi period